古田遺跡

— 古田遺跡第１次・第２次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第509集

１９９７

福岡市教育委員会

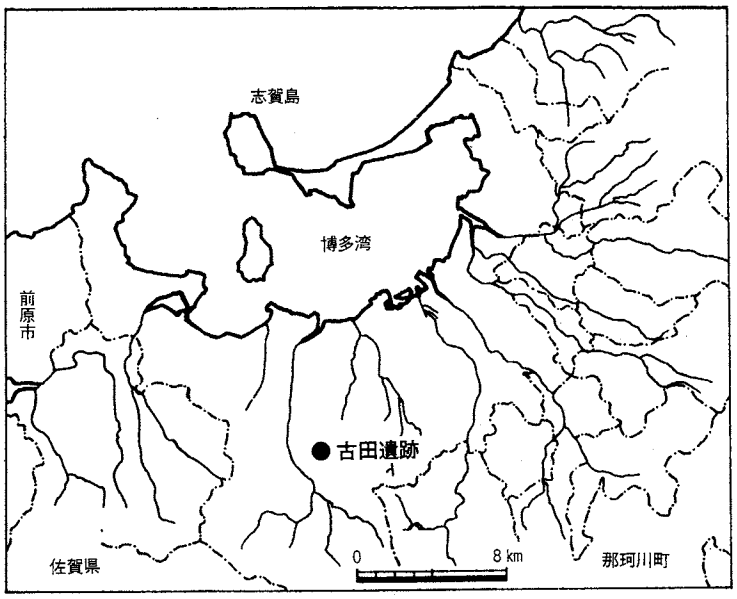
	誤	正
6頁　2行目	各部	谷部
22頁 22行目	流文岩	流紋岩

NO-31783

古田（ふるた）遺跡

— 古田遺跡第１次・第２次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第509集



	調査番号	遺跡略号
１次調査	９４２８	ＦＲＢ－１
２次調査	９５０７	ＦＲＢ－２

１９９７

福岡市教育委員会

巻頭図版　1

(1)　SK 028（1 次調査・東から）

(2)　SK 028 人骨出土状況（1 次調査・北から）

巻頭図版　2

(1)　鉄製鋤先出土状況（１次調査）

(2)　SK 024（２次調査・南から）

序

玄界灘に面し、古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と歴史が残されています。その中でも早良平野は大陸との交流の中で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し未来へ伝えていくのは行政に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大はこの地域にも及ぶようになり、その結果その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市教育委員会は開発にともなってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い記録の保存につとめています。

本書は公園建設に伴う早良区重留の古田遺跡の発掘調査の成果について報告するものです。この調査地点は福岡から佐賀に抜ける国道263号線に面する地域であり、現在開発がもっとも進みつつある地点のひとつで重留須恵器窯跡遺跡や荒平城の出城等の重要な遺跡が存在しています。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また、研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。最後に発掘調査から報告書の至るまで、多くの方々の御理解と御協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

1997年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　町　田　英　俊

例　言

□本報告書は早良区重留の重留中央公園の建設に伴って1994年７月５日から11月４日にかけて調査を行った古田遺跡１次調査と1995年５月10日から６月28日にまで調査を行った２次調査の発掘調査報告書である。

□本書に収録した発掘調査は１次調査を池田祐司が２次調査を屋山洋が担当した。

□遺構実測の作成は池田・澤下孝信・坂本憲明・屋山・辻節子・山田ヤス子が中心に、遺構の写真撮影は池田・屋山が行った。また、遺物の実測は山口譲治・池田・屋山が、写真撮影は平川敬治が行った。空中写真は、㈲空中写真企画による。

□本書に掲載した挿図の製図は池田・屋山・山口朱美が行なった。

□本書で用いた方位は磁北で、真北より６°21″西偏する。

□遺構・遺物番号は各調査次数ごとに通し番号とした。

□本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

古田遺跡第１次調査

遺跡調査番号	９４２８	遺跡略号	FRB－１	分布地図番号	入部85－Ｃ－３
調査地地番	早良区重留５丁目235外				
開発面積	9,000m^2	調査面積	4,358.5m^2	調査原因	公園建設
調査期間	９４０７０５～９４１１０４		担当者	池田祐司	

古田遺跡第２次調査

遺跡調査番号	９５０７	遺跡略号	FRB－２	分布地図番号	入部85－Ｃ－３
調査地地番	早良区重留５丁目				
開発面積	3,800m^2	調査面積	1,010m^2	調査原因	公園建設
調査期間	９５０５１０～９５０６２８		担当者	屋山　洋	

本文目次

Ⅰ　はじめに …… 1
1　調査に至る経過 …… 1
2　調査の組織 …… 1
3　遺跡の立地と環境 …… 1
4　採集遺物 …… 4
Ⅱ　古田遺跡第１次調査の記録 …… 5
1　調査の概要 …… 5
2　遺構と遺物 …… 6
(1)　古田１号墳 …… 6
(2)　火葬施設 …… 7
(3)　焼土坑 …… 9
(4)　その他の土坑 …… 11
(5)　掘立柱建物 …… 16
(6)　溝 …… 19
(7)　その他のピット …… 19
(8)　包含層およびその他の遺物 …… 20
(9)　石器 …… 21
Ⅲ　古田遺跡第２次調査の記録 …… 23
1　調査の概要 …… 23
2　遺構と遺物 …… 23
(1)　溝 …… 23
(2)　土坑 …… 23
(3)　焼土坑 …… 25
(4)　火葬関連遺構 …… 28
(5)　小結 …… 28
Ⅳ　まとめ …… 31

挿図目次

第１図　周辺図１(1/8000) …… 2
第２図　周辺図２(1/8000) …… 2
第３図　調査区位置図(1/1000) …… 3
第４図　採集遺物 (1/3・1/1) …… 4
第５図　１次調査全体図(1/500) …… 5
第６図　１号墳周辺測量図(1/100) …… 6
第７図　１号墳石室実測図(1/40) …… 6
第８図　石室出土遺物(1/2) …… 7

第９図　土坑実測図１(1/40) …… 8
第10図　土坑実測図２(1/40) …… 10
第11図　土坑実測図３(1/40) …… 12
第12図　土坑実測図４(1/40) …… 13
第13図　土坑実測図５(1/40) …… 14
第14図　土坑出土遺物実測図(1/3) …… 15
第15図　掘立柱建物実測図(1/100) …… 17
第16図　ピット集中部平面図１(1/100) …… 18
第17図　ピット集中部平面図２(1/100) …… 18
第18図　溝土層断面図(1/40) …… 19
第19図　ピット出土遺物実測図(1/3) …… 19
第20図　包含層出土遺物実測図１(1/3) …… 20
第21図　包含層出土遺物実測図２(1/1・1/2) …… 21
第22図　第２次調査区全体図(1/200) …… 24
第23図　土坑実測図１(1/40) …… 26
第24図　土坑実測図２(1/40) …… 27
第25図　焼土坑実測図(1/30) …… 29
第26図　火葬関連施設(1/20) …… 30
第27図　ＳＫ026出土遺物(2/3) …… 31

図版目次

巻頭図版１　1）SK028（１次調査・東から）　2）SK028人骨出土状況（１次調査・北から）
巻頭図版２　1）鉄製鋤先出土状況（１次調査）　2）SK024（２次調査・南から）
図版１　1）１次調査区全景（北から）　2）調査区南半（北から）
図版２　1）調査区全景（北西から）　2）１号墳（北から）
図版３　1）２区（南から）　2）SB017（北から）　3）SB016（北から）　4）SB059（西から）
図版４　1）１区（北から）　2）ピット集中部（第17図・北から）　3）SK026（西から）
4）SK028（東から）
図版５　1）SK044（東から）　2）SK045（西から）　3）SK047（西から）　4）SK047（西から）
図版６　1）SK001（北から）　2）SK002（東から）　3）SK010（南から）　4）SK011（東から）
5）SK015（西から）　6）SK029（西から）　7）SK032（南から）　8）SK035（北西から）
図版７　1）SK014（東から）　2）SK023（西から）　3）SK024（西から）　4）SK025（東から）
5）SK041（西から）　6）SK042（北から）　7）SK042（東から）　8）SK051（東から）
図版８　1）１次調査出土遺物
図版９　1）２次調査全景（西から）2）SK005（西から）3）SK007（東から）4）SK010（北西から）
図版10　1）SK012（南から）　2）SK019（西から）　3）SK018（東から）　4）SK025（南から）
図版11　1）SK022（東から）　2）SK022（西から）　3）SK022（西から）　4）SK024土層（南から）
図版12　1）SK024（南から）　2）SK024（南から）　3）SK026（東から）

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経過

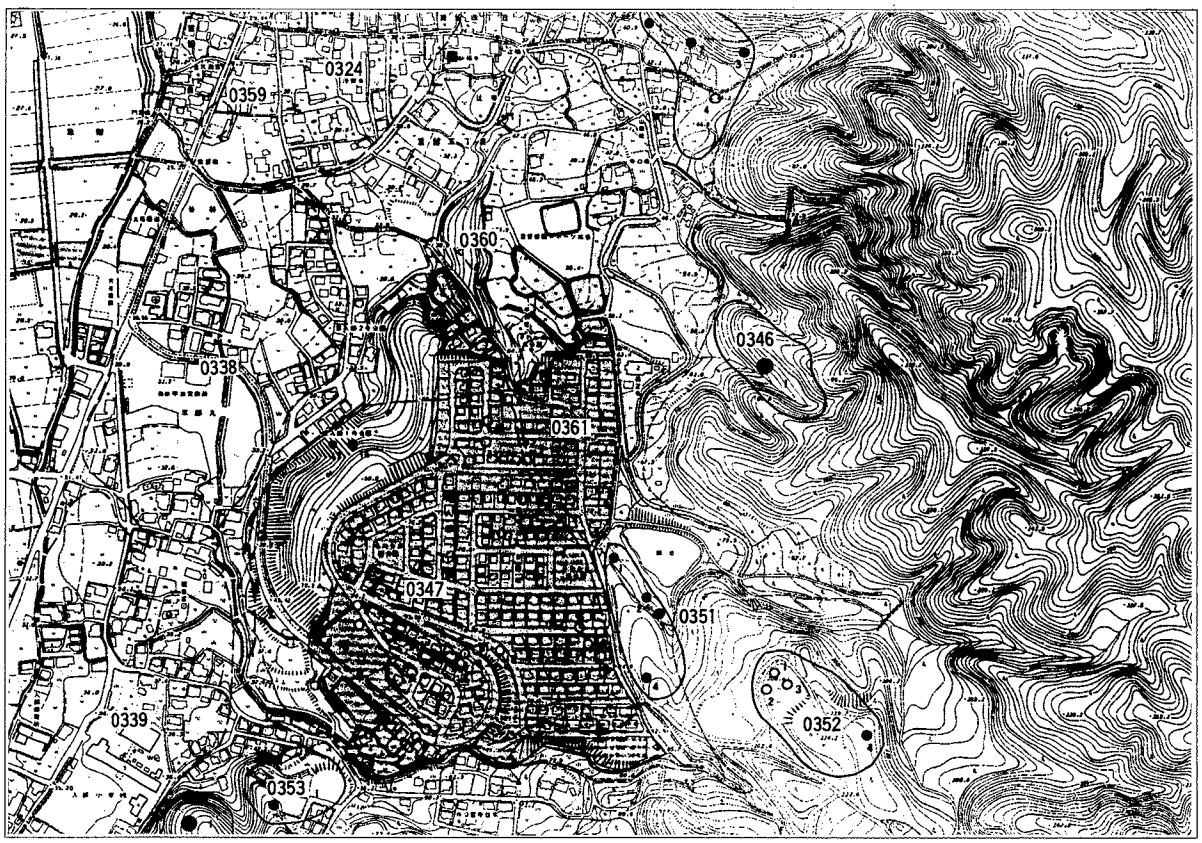
本調査地点の現状は北側が重留田園スポーツ公園で南側は水田であるが、今回都市公園整備事業に関連して拡大整備する事となった。そのため、野球のグランド施設等の建設造成に伴う埋蔵文化財事前調査の依頼が1994年３月13日に公園計画課から埋蔵文化財課に提出された。申請地は古田遺跡群の隣接地であり、南側に隣接する早良台団地造成に伴う発掘調査で古墳群等の調査がおこなわれていたため1994年４月７日に試掘調査を行った。東西の尾根上は削平がはげしく遺構は確認できなかったが、中央の谷部でピット・溝・土坑等の遺構を確認した。調査は南側の水田部分と北側のグランド部分を２年に分けて調査することとなり、第１次調査は1994年７月５日～11月４日まで本調査を行った。第２次調査については翌年の1995年４月６日に試掘調査を行い、南側は削平のため遺構は確認できなかったが、北側でピット群と土坑・焼土坑を確認したため、本調査を1995年５月10日から６月28日まで行った。

2　調査の組織

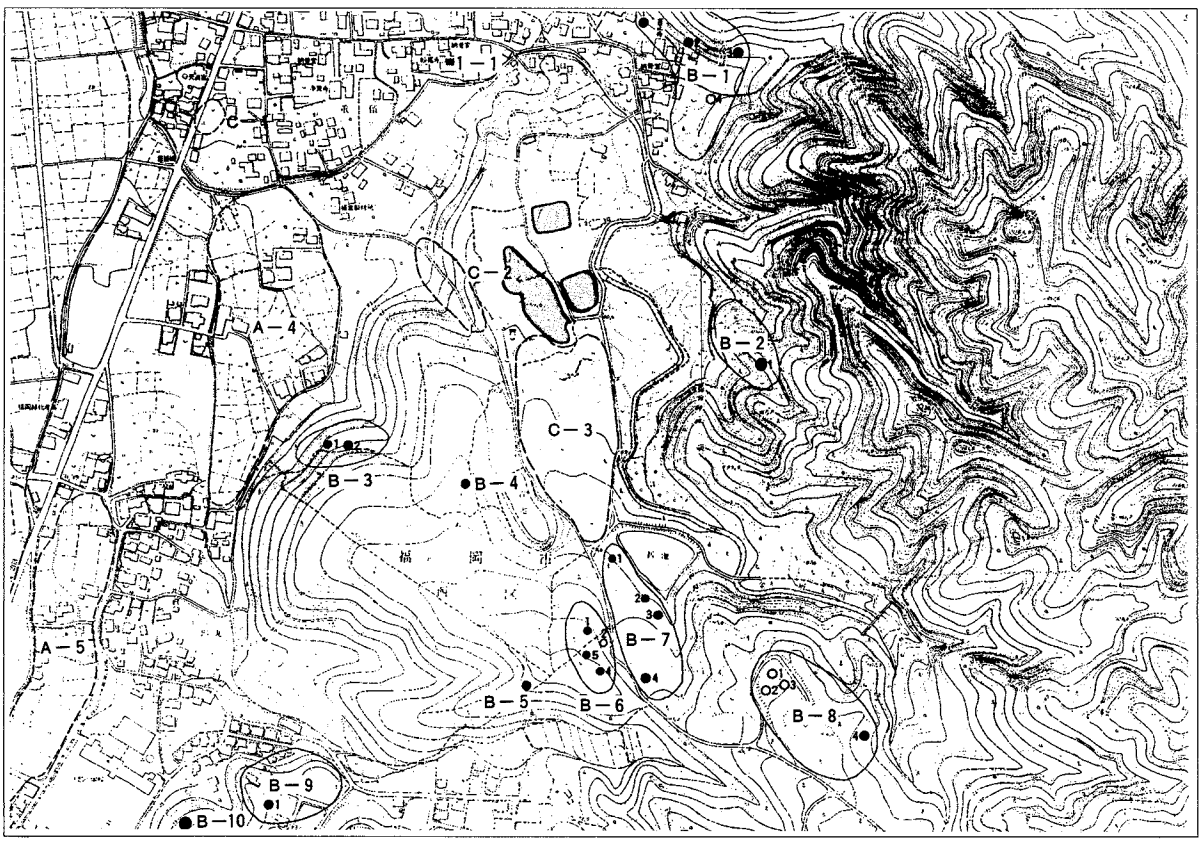
調査委託　都市整備局公園計画課
調査主体　福岡市教育委員会
　　埋蔵文化財課長　折尾学（前）　荒巻輝勝（現）
　　埋蔵文化財課第１係長　横山邦継
調査庶務　埋蔵文化財課第１係　　入江善男（前）　小森彰（現）
試掘担当　埋蔵文化財課第１係　　長家伸　榎本義嗣
調査担当　埋蔵文化財課第１係
　　第１次調査　池田祐司　第２次調査　屋山洋
調査員　　澤下孝信　　坂本憲明
作業員
第１次調査
　青柳寿子　青柳美智子　因ヨシ子　海津宏子　倉光アヤ子　栗木和子　小金丸ミネ子　坂原美佐子
　末松タツエ　高橋茂子　中村昭市　長谷川律子　波多江喜美子　土生喜代子　広瀬梓　細川友喜
　真名子シズエ　真鍋キミエ　三谷朗子　満田雅子　三好道子
第２次調査
　青木秀夫　阿比留治　池　健介　岩見敏子　牛尾秋子　緒方シマヨ　金子ヨシ子　川島ツキエ
　惣慶トミ子　辻節子　鶴田喜美江　鶴田祐子　西嶋彰子　平川英子　平川富美子　平川伸子
　平川史子　山尾タマエ　山口タツエ　山田ヤス子　吉岡勝野
整理作業
　上田保子　神谷玲子　黛早津紀　中原尚美　前田みゆき　濱野年代　山口初子

3　遺跡の立地と環境

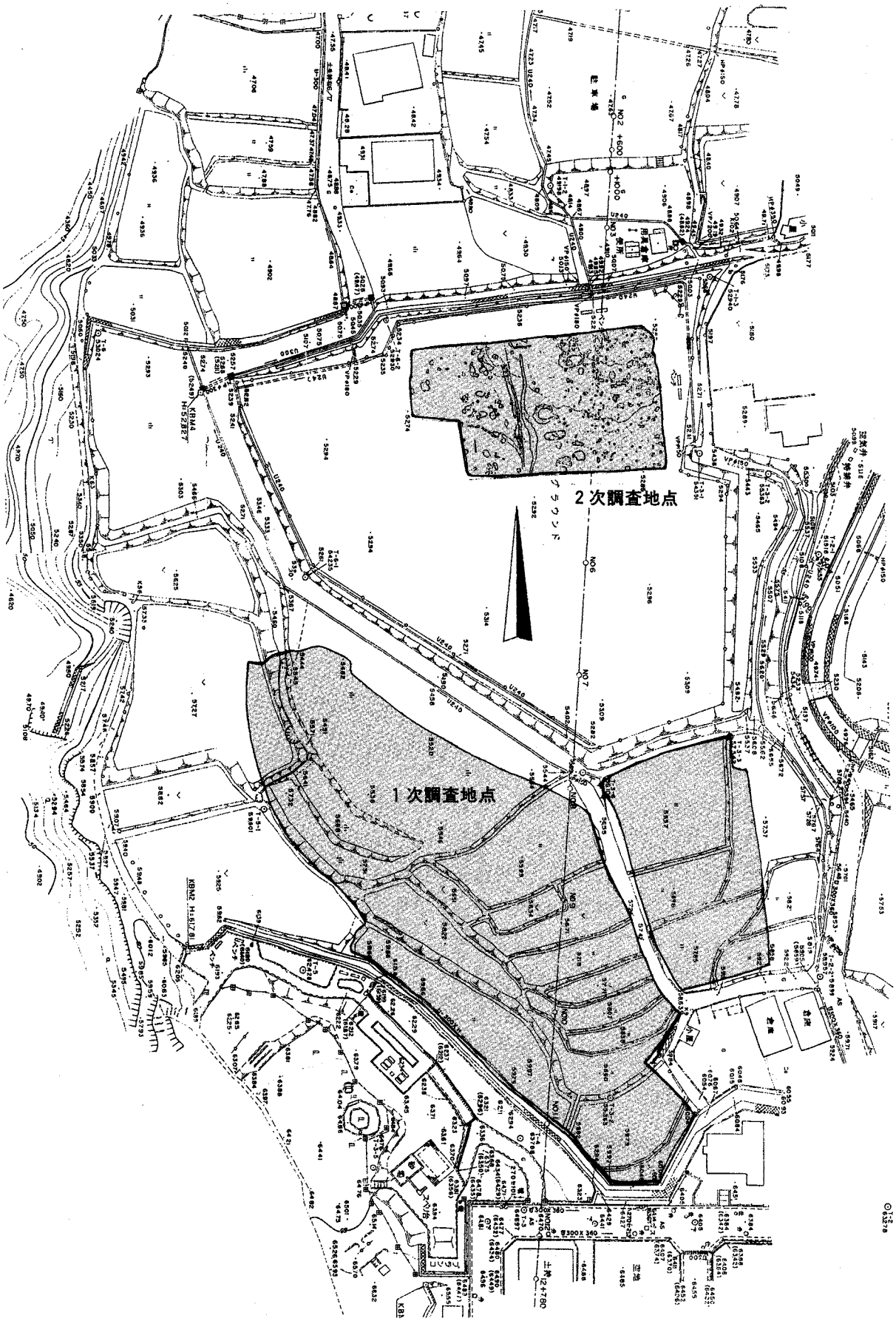
古田遺跡群は早良平野中央部の東端に位置し、油山山塊から西北に延びる丘陵の先端部分に位置する。現在の地名は重留５丁目である。西側には幅100ｍ程の緩やかな丘陵が延び、その東側の落ち際には三郎丸古墳群のＥ群とＦ群が存在している。本調査地点でも１次調査では古墳石室の残骸が出土し、２次調査でも石室の残骸らしき掘り込みを確認したが、Ｆ群が金屑川沿いに延びるものと思われ



第１図　周辺図１（1/8000）



第２図　周辺図２（1/8000）



第3図　調査区位置図(1/1000)

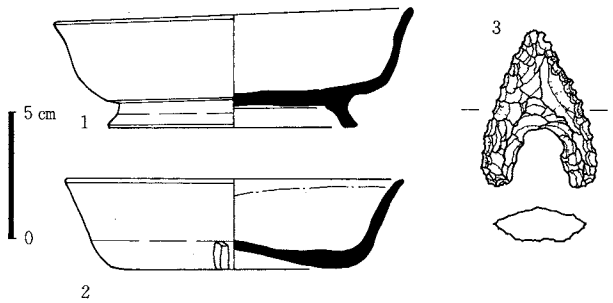
る。本調査地点は古墳がのる丘陵から北側に傾斜する斜面上の幅230ｍの谷部に位置する。谷の東側に金屑川が流れる。現状では西側の丘陵との境界はなだらかな斜面であるが、調査の結果、丘陵落ち際に幅５ｍ以上、深さ３ｍほどの谷が埋没しているのを確認した。覆土は軟質で植物の遺体を多く含んでいた。近現代の塵も中程に近い所から出土したため、近年の埋没と思われる。

古田遺跡が位置する荒平山の山頂部分には荒平城があり、戦国時代には小田部氏の山城があった。嶺を少し下りたところに幾多の屋敷跡があったとされる。早良郡史には荒平城に至る道として荒平山南側、現在の早良区脇山の大門の交差点に近い城の原と荒平山西側の重留の名があげられており、昭和50年の地図には荒平山への道として、重留の集落から金屑川沿いに上り、調査地点の東端部を通る道が記されている。２カ所の登り口には城の守りとして防御施設が置かれ、城の原には搦め手が、重留は城の大手が設置されたとかかれており、それに関連する施設が本遺跡の周囲に存在するものと考えられる。地形としてはやや広い谷部が急に狭くなる、新池近辺の丘陵上に存在する可能性が高く、そのしたに位置する本調査区近辺にも屋敷などが存在した可能性が考えられる。また、荒平城との関連はよく分からないが、重留の東南にある茶臼城について書かれており、城主は土生宗観とし、土生氏の祖先は豊後からこの重留に来たが茶臼城を築城したのは和銅４年であるとしている。荒平城は天正７年小田部紹叱が当時龍造寺方であった内野の大教坊氏を攻めたが逆に敗北し、戦死した。このとき荒平城は廃城となり、重留の大手もそのときに廃止されたと思われる。その他、調査区の北西の重留の集落内には西本願寺派妙福寺や宝満宮がある。いずれも中世末以前に建立されとしており、長い歴史をもつ。特に妙福寺の庭園は名勝で、市の文化財に指定されている。

調査区周辺の採集遺物

これらの遺物は１次調査の最中に調査区近隣居住の方から寄贈された資料である。重留田園スポーツ公園のグランド造成時に今回の１次調査区と２次調査区の境界近辺で採集したらしい。

001は須恵器高台付坏である。口縁はやや歪み波打っている。平面形は楕円形を呈し、長径14.9cm、短径14.2cm、器高4.8cmを測る。両面とも薄い灰色で白色砂を多く含む。焼成は良好である。底部は回転ヘラ削りで高台を接合した後、ナデを施している。全体的に粗いつくりである。002は須恵器坏である。口径は13.4cm、器高3.7cmを測る。焼成時は伏せており、外面に自然釉と他の器の一部が付着している。白色砂を多く含み、焼成は良好である。外面底部はヘラ削りである。体部は横ナデ、内面底部は静止ナデを施す。焼け歪みにより底部が垂れている。003は古銅輝石安山岩製の石鏃である。全長2.0cm、幅1.4cmを測る。



第４図　採集遺物（1/3・1/1）

Ⅱ　古田遺跡第１次調査の記録

１　調査の概要

調査前は水田で、狭い田面が段をなしていた。北側はグランド、南側は団地造成がすでに成されている。調査区の中央には幅2.5ｍの農道がありこの東側を１区、西側を２区とした。

試掘の結果、東側の尾根上は削平されて遺構がないため、対象地中央の谷状地形の部分に調査区を設定した。調査は重機で遺構面までの廃土を除去し遺構の検出を行った。遺構面は礫を含む茶褐色土

第５図　１次調査全体図(1/500)

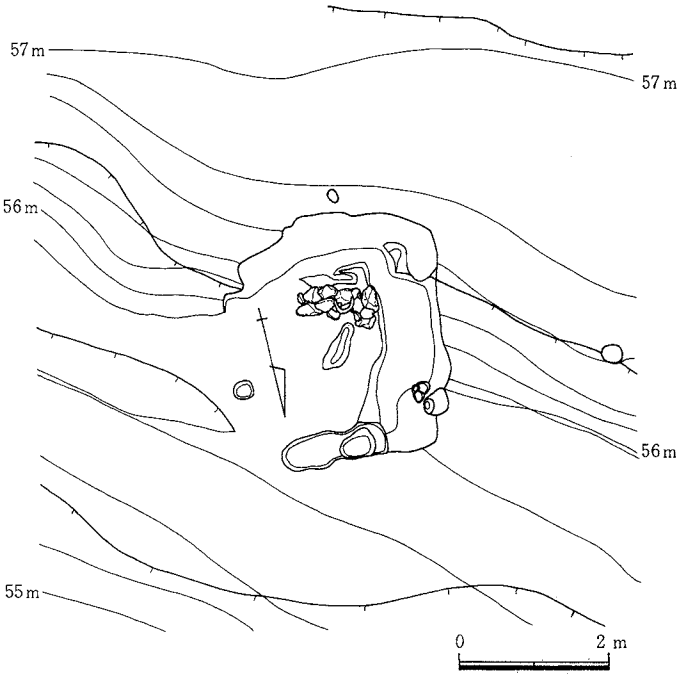
である。丘陵部は表土直下、盛土部分は60cm程で遺構面となる。各部ではグランド造成による盛土が約３ｍを測り、谷が入る。

遺構は造成のために削平されているが、谷部の平坦地および緩斜面に多く見られる。遺構は散在するが掘立柱建物が集まる付近が１つの中心である。古墳１基、火葬遺構５基、焼土坑８基、土坑24基、掘立柱建物４棟、多数のピットを検出した。

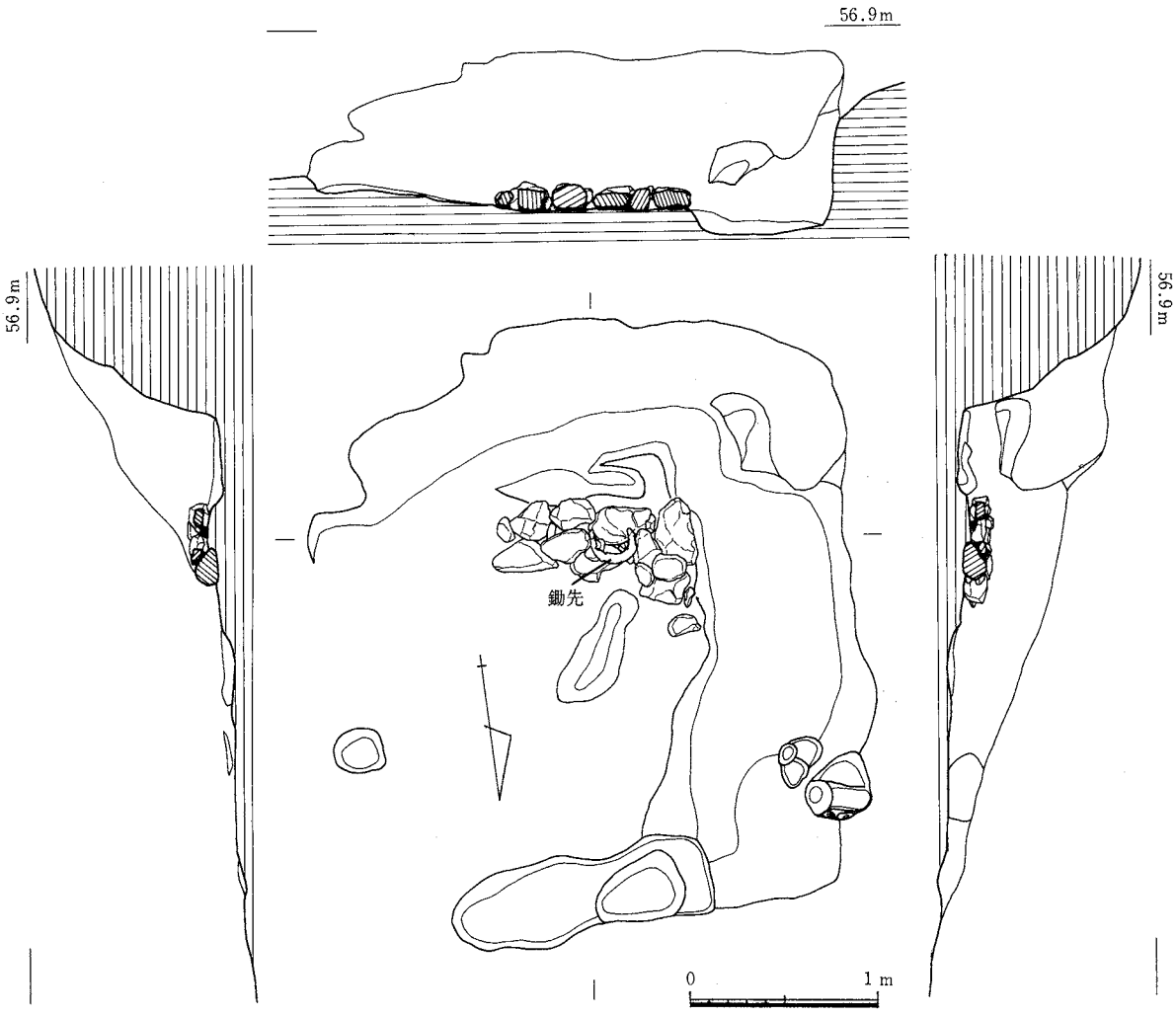
2　遺構と遺物

(1)　古田１号墳（第５図～第８図）

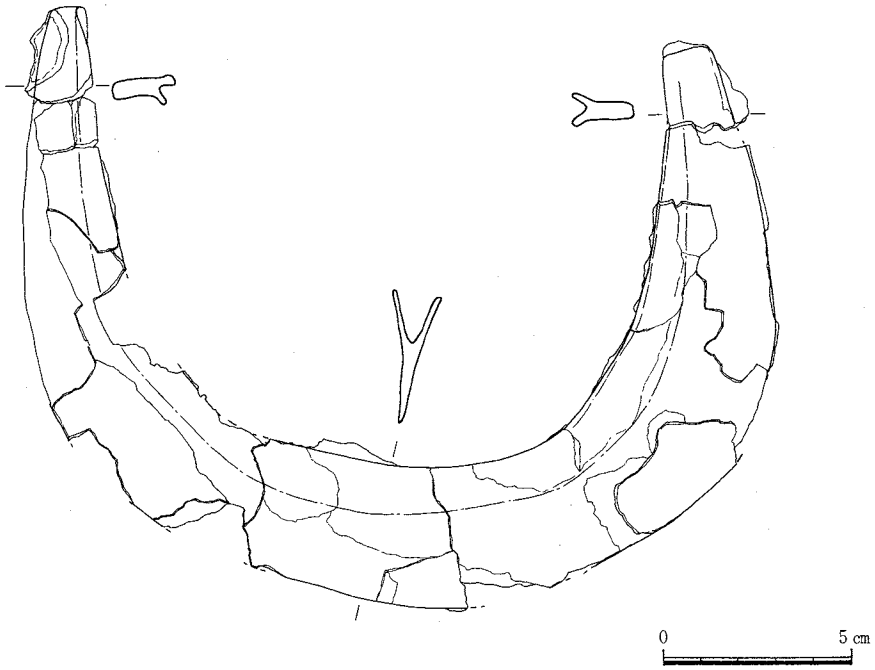
水田造成のため削平されている。敷石が一部が残り、墳丘は地山成形を含めて全く残っていない。覆土の上部は水田の土壌が



第６図　１号墳周辺測量図(1/100)



第７図　１号墳石室実測図(1/40)



第8図　石室出土遺物(1/2)

堆積する。石室は主軸をN－8°－Eにとり、谷の下部に向かって開口する。石室の堀方は左側壁側が大きく削平されるが、長方形を呈すと考えられ奥壁部分で幅2.6mを測る。深さは現存で97cm。幅70cm、深さ18cm程のくぼみに腰石を配したものと考えられる。石室の幅は1.4m以上、長さは2m以上である。敷石は20～30cm大の丸みを帯びた礫で奥壁部分のみに残存する。

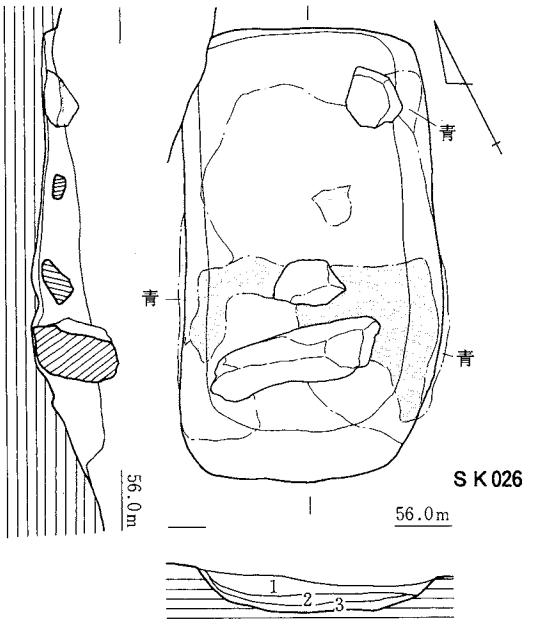
遺物はかろうじて残った敷石上に鉄製鋤先が出土した。遺存状態が悪く、検出時すでに薄い板状に細かくはげていた。第8図は接合後に出土状況図と合わせて復元した。耳部も残っており、劣化前は完形であったと考えられる。刃部巾19.5cm、長さ16cmを計る。横広で刃部は緩やかに弧を描きU字形を呈す。弧は左右対称ではなく片寄りが見られる。側面は、一部腐植により曲がった部分があるが、そこ以外は直線的である。器厚は刃部先端は剝げて薄くなり、耳部は腐植により膨れているため明確なところは不明である。刃部はほぼ均一で耳部が厚くなる。木質は観察できない。鋤先は刃を入口側に向けており、柄は装着していなっかたか、装着して奥壁に立てかけてあったものと考えられる。

(2)　火葬施設

13基の焼壁土坑のうち5基から骨片が出土し、いずれも床に7、80cm大の横長の礫を配する共通した特徴を持つ。2区に分布するが、散在する。これらを火葬に関連する遺構の可能性が高いと考え、まとめて報告する。

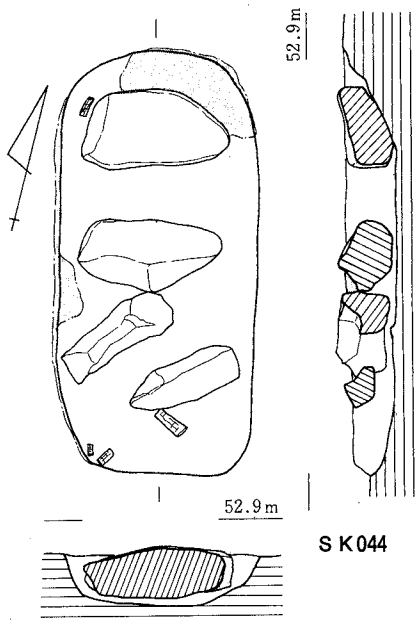
SK026（第9図）　長方形を呈し、長軸240cm、短軸135cm、深さ35cmを測る。削平により床近くが残るのみである。南側に長さ95cmの礫を配し、他に30cm大の礫が見られる。礫が抜かれた様子はない。覆土は焼土混じりの黄褐色土で床には炭、灰を多く含む黒色土が広がる。礫はこの上に乗る。また南半には焼土が広がる。北側の黄茶色土下部は骨粒が見られる。床および壁は焼けており、青色に変色する。

SK028（第9図）　横広の長方形を呈し、長軸205cm、短軸140cm、深さ65cmを測る。南側に長さ90cmの礫を配し、北側には丸みを帯びた70cm大の礫を2つ方向を変えて配す。覆土は焼土混じりの

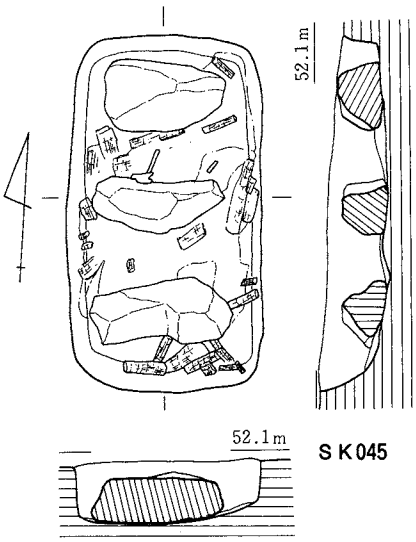


SK026

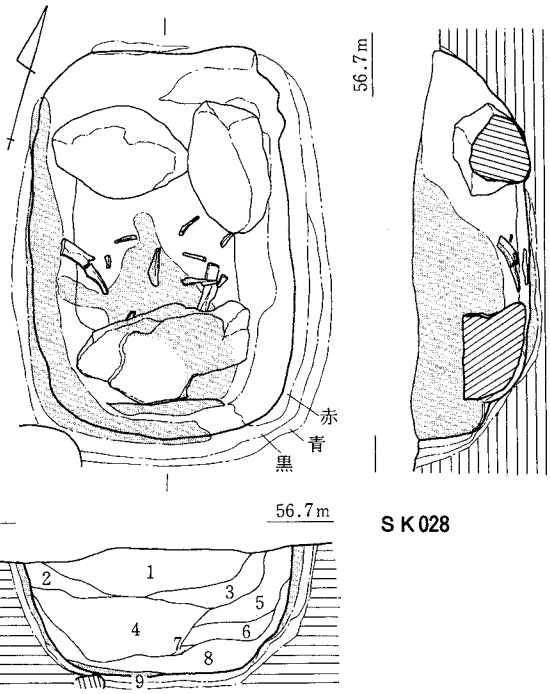
1 黄褐色土（焼土を多く含む）
2 焼土
3 黒色土



SK044



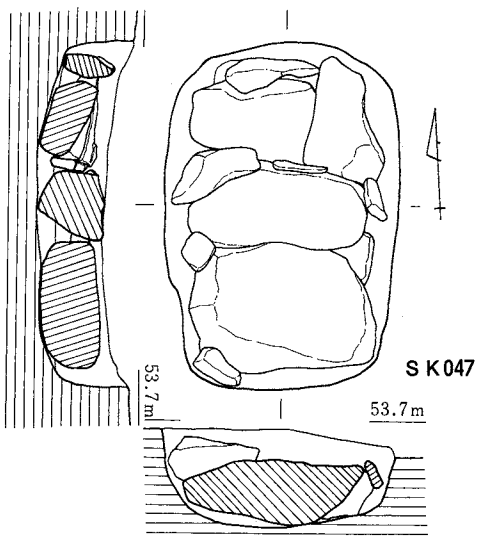
SK045



SK028

1 灰茶褐色土(炭を含む)
2 黄灰褐色土(焼土粒を含む)
3 黄褐色土(少量の炭を含む)
4 黄茶色土やや粘質(焼土、炭を少量含む)
5 黄茶褐色土やや粘質
6 やや明るい黄茶色土(焼土を含む)
7 焼土
8 わずかに青みをおびた灰色粘質土(炭を含む)
9 焼土

0 1m



SK047

第9図 土坑実測図1 (1/40)

黄茶色土で床には炭、灰を多く含む黒色土、その上に焼土が見られる。この上は灰層で、これに骨片が入る。北側の礫はこの灰色土の上に乗るが、南側の礫は直接地山に接する。壁は厚く赤色に、その裏および床は紫色に変色している。礫の間には骨片が散乱する。

ＳＫ044（第９図） 幅狭の長方形を呈し、長軸235cm、短軸105cm、深さ26cmを測る。60から70cm大の横長の礫を４つ配す。覆土は焼土混じりの黄茶色土で床には炭、灰を多く含む黒色土が広がり、長さ15cmの炭が残る。南側の礫はこの黒色土の上に乗るが、北側の礫は直接地山に接する。壁は赤茶色に、その裏および床は薄く紫色に変色している。礫の間に骨片が散乱する個所が一部分ある。

ＳＫ045（第９図） 長方形を呈し、長軸190cm、短軸105cm、深さ35cmを測る。65から75cm大の横長の礫を３つ配す。覆土は焼土混じりの黄茶色土で、床には炭、灰を多く含む黒色土が広がり、炭が原形を残している。礫はこの黒色土の上に乗る。壁は赤茶色に変色するが床にはおよんでいない。骨粒が黒色土上にわずかに見られる。

ＳＫ047 幅狭の長方形を呈し、長軸187cm、短軸120cm、深さ50cmを測る。90cm大までの礫を堀方いっぱいに敷き詰め、上面を平坦にそろえる。覆土は地山に近い黄茶色土で焼土、炭、骨片をふくみ、締まりがある。炭層は特に形成されていない。壁は赤茶色に変色する。

(3) 焼土坑

焼壁土坑のうち骨片が出土していないもので、火葬施設としたものより壁の焼けが弱く、大きさ、形にばらつきがある。遺物が出土したのはＳＫ042のみである。

ＳＫ014（第10図） 小形の長方形を呈し、長軸105cm、短軸70cm、深さ30cmを測る。床直上には炭層があり、地山に近い土を挟んだ上に炭層が堆積する。中心付近には25cm大のピットがある。壁は床から10cmを除いて赤変している。

ＳＫ023（第10図） 縦長の台形を呈し、長軸190cm、北側の幅140cm、南側の幅90cm、深さ40cmを測る。床直上には炭層があり、地山に近い土を挟んだ上に炭層が堆積する。中心付近には20cm大のピットが２つある。壁は床から10cmを除いて赤変し、一部緑色になっている。

ＳＫ024（第10図） 方形に近い。長軸150cm、短軸140cm、深さ37cmを測る。床直上には炭を多く含み、覆土は地山に近い土に炭粒が入る。壁は一部が赤変しているのみである。床には二つの礫があった。西側には張り出しがあり覆土も本体と同じである。

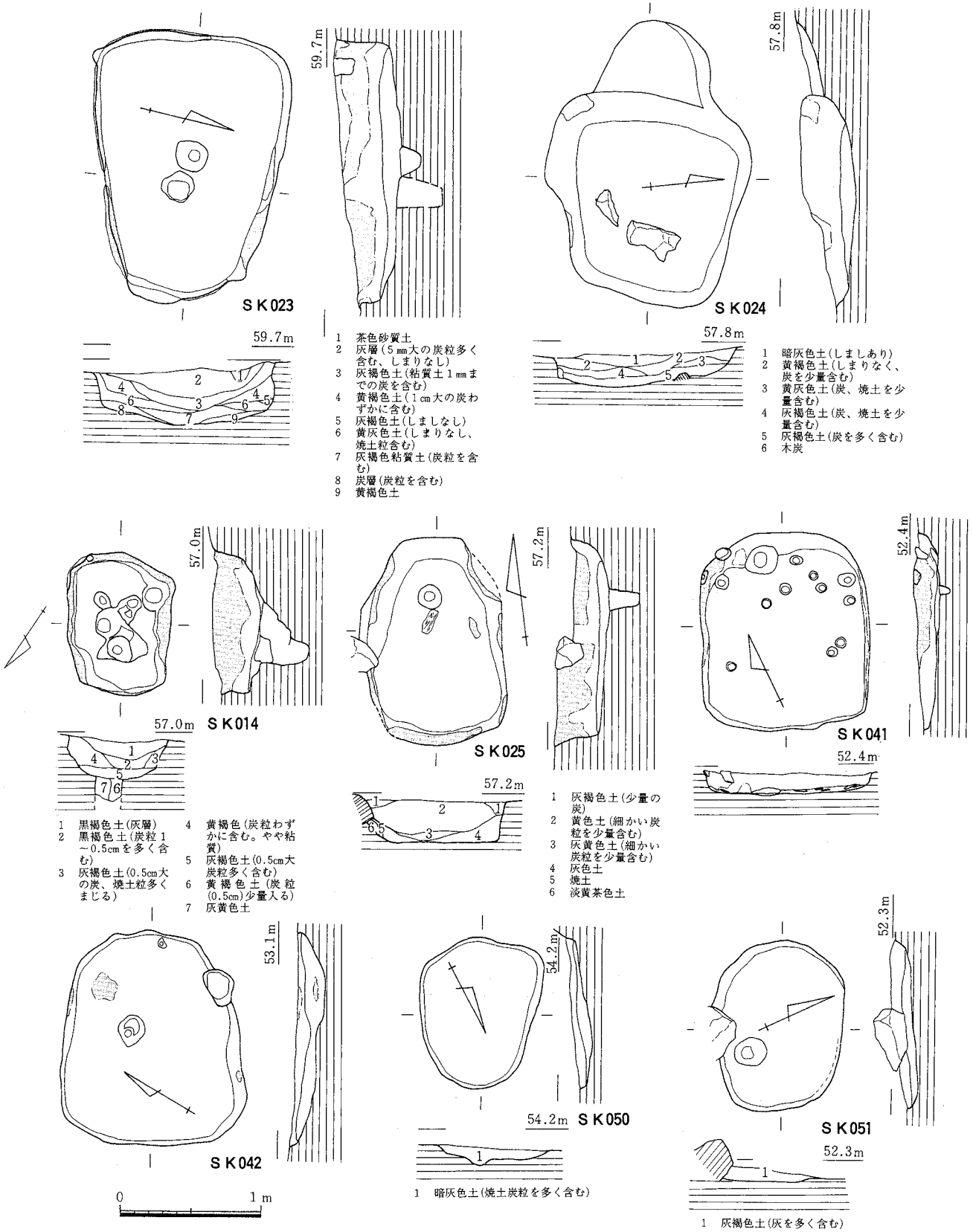
ＳＫ025（第10図） 縦長の台形を呈し、長軸150cm、短軸100cm、深さ35cmを測る。床直上には炭層があり、炭を含んだ地山に近い土が堆積する。北よりには15cm大のピットが１つある。壁は床から10～20cmを除いてほとんどが赤変し、床もほんの一部ではあるが赤変している。

ＳＫ041（第10図） 方形に近い。長軸190cm、短軸170cm、深さ18cmを測る。床直上は炭層である。床面には７、８cm大、深さ10cmほどのくぼみが散在する。壁は一部赤変する。

ＳＫ042（第10図・第14図） 台形を呈し、長軸150cm、南側の幅135cm、南側の幅90cm、深さ20cmを測る。床直上は炭層である。床の中央西寄りには20cm大、深さ20cmほどのピットがある。壁は床と壁が一部のみ赤変する。須恵器の甕および土師器の甕の破片が出土した。第14図13は須恵器の杯蓋で、1/10からの復元、口径12.2cmには疑問がある。残存部は回転ナデ調整を施す。ヘラ記号と思われる深い沈線が見られる。内面はやや紫色がかり、焼きがあまい。第14図14、15は須恵器の甕の胴部である。いずれも外面に平行叩き、内面に同心円文形の当て具痕が残る。

ＳＫ050（第10図） 台形を呈すが床近くのみしか残っておらず堀方のプランとは一致していないと思われる。長軸110cm、南側の幅80cm、深さ100cm測る。炭層が堆積する。壁の変色は観察できない。

ＳＫ051（第10図） 床のみが残存する。楕円形を呈し、長軸120cm、南側の幅90cm、深さ10cmを



第10図　土坑実測図2 (1/40)

測る。床直上は炭層である。床の中央西寄りには20cm大、深さ20cmほどのピットがある。壁の変色は観察できなかった。

(4) その他の土坑

遺物は特に記載がない場合は出土していない。

ＳＫ001（第11図） 隅丸長方形を呈し長軸150cm、短軸106cm、深さ50cmを測る。堀方は明瞭で壁も直に立ち上がる。覆土は均一な黄褐色土で締まりがない。

ＳＫ002（第11図） 円形を呈し径130cm、深さ80cmを測る。床の中心には径20cm、深さ５cmのくぼみが見られる。堀方は明瞭で壁も直である。均一な黄褐色土を覆土とし20cm大の礫が含まれる。

ＳＫ003（第11図） 鉄アレー形の土坑で長軸350cm、短軸70cm、深さ25cmを測る。しまりのない黄色粘質土を覆土とする。床には礫が露出する。掘り方は不明瞭である。

ＳＫ004（第11図） 縦長の不整楕円形を呈す。長軸280cm、短軸75cm、深さ20cmを測る。黄色粘質土を覆土とする。床面付近には礫がいる。中央部に径15cm、深さ10cmのピットがある。堀方は明瞭である。

ＳＫ005（第11図） 縦長の不整形土坑で長軸180cm、短軸80cm、深さ40cmを測る。黄褐色土を覆土とする。

ＳＫ006（第11図） 長方形土坑で長軸160cm、短軸125cm、深さ35cmを測る。南側に段がつく。黄色粘質土を覆土とする。

ＳＫ007（第11図） 不整長方形を呈し、長軸135cm、短軸90cm、深さ30cmを測る。黄褐色土を覆土とする。

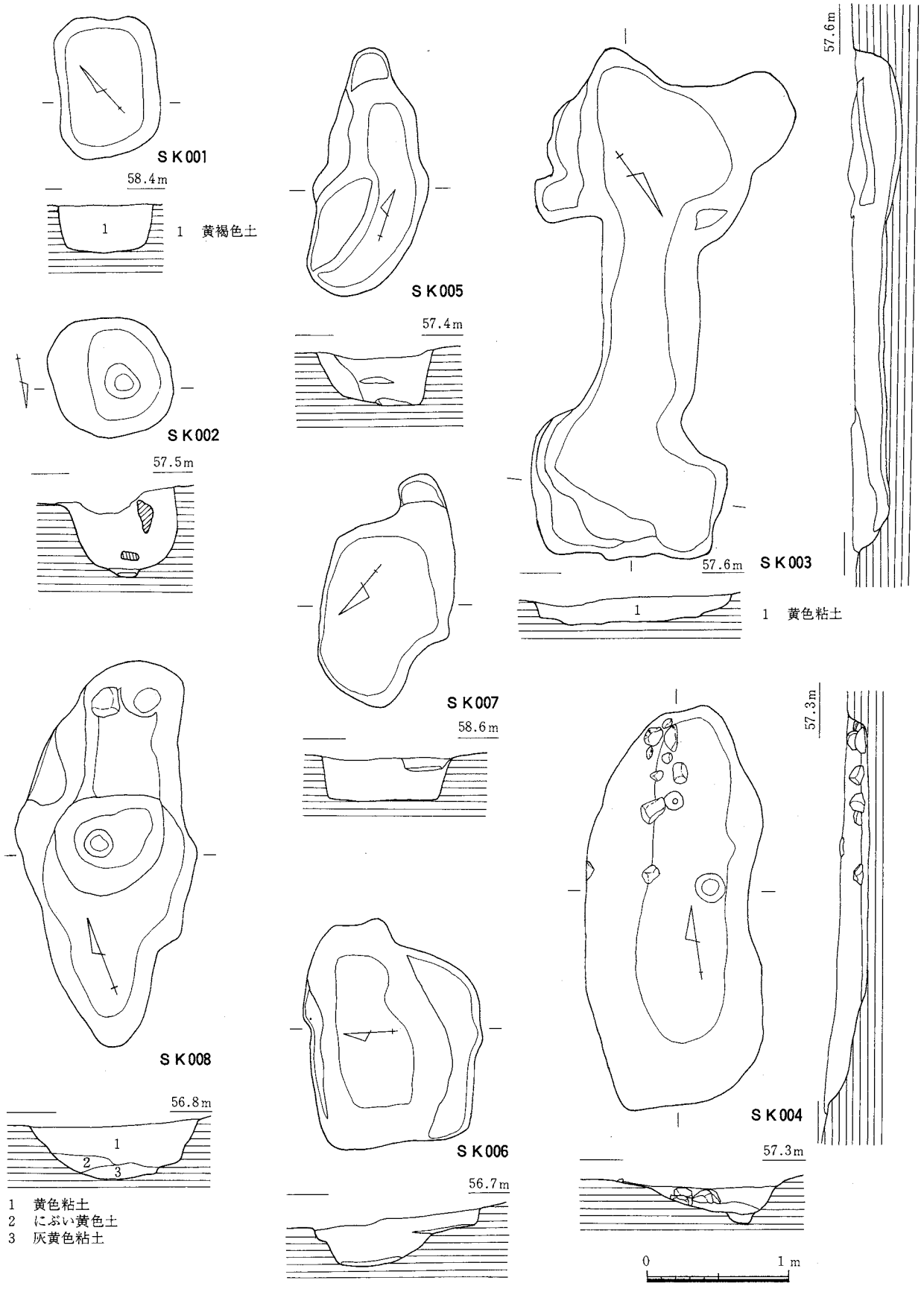
ＳＫ008（第11図） 縦長の不整形土坑で長軸270cm、短軸75cm、深さ40cmを測る。黄色粘質土を覆土とするが堀方が不明瞭である。自然の作用による可能性がある。

ＳＫ009（第12図） 縦長の楕円形土坑で長軸120cm、短軸55cm、深さ15cmを測る。しまりのない黄色粘土を覆土とする。

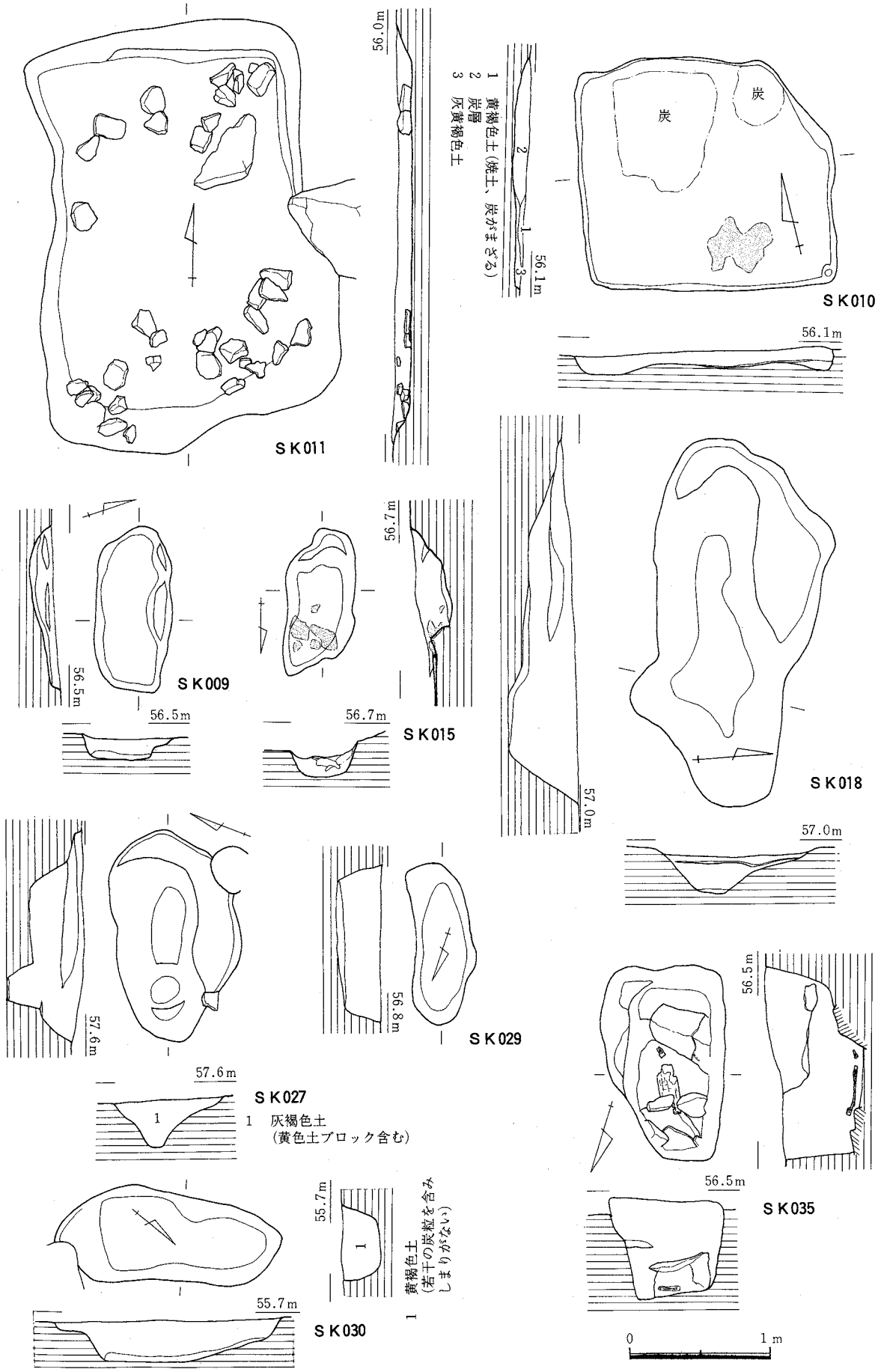
ＳＫ010（第12図） 一部欠けるが、ほぼ方形を呈す。残りが悪い。長軸165cm、短軸130cm、深さ10cmを測る。堀方は急だが北壁はなだらかである。覆土は灰色かっかた黄茶色土で炭を多く含む。床面には炭、焼土が広がる。ＳＢ17の北に隣接し、関連する遺構の可能性がある。

ＳＫ011（第12図・第14図） 長方形を呈す。長軸300cm、短軸210cm、深さ10cmを測る。堀り方は緩やかである。覆土は黄茶褐色土で炭を多く含む。20cm大の礫が南北隅によって散在する。また、床には焼土が見られる。ＳＢ016の南に隣接し、ＳＫ010と同様に建物と関連がある可能性がある。またＳＢ059を切っている。遺物は第14図１から９が出土した。１、２は須恵器の甕の胴部である。いずれも外面に疑似格子目叩き痕、内面に同心円状当て具痕が残る。３は須恵器の甕の頸部から胴部である。頸部内外面に叩き痕後に回転ナデ調整を施す。４は須恵器の肩部で外面に掻き目、内面は回転ナデ調整が見られる。５は白磁皿の底部である。わずかに緑色がかった白色の釉が施され、外面底部は露胎である。６は褐釉陶器の胴部で内外面に茶褐色の釉がかかる。７は碩器のすり鉢で細く浅い摺り目が見られる。８、９は粘土塊である。８は小さな方で12ｇを量る。砂粒は少量で淡橙色を呈す。９は大きな方ですさ等の抜いた跡がある。２㎜大までの砂粒を含み橙色から淡黄色を呈す。126ｇを量る。同様な粘土が、大小約30片、総量にして約800ｇが出土した。また図示していないが土師器の甕の胴部片が出土している。外面の1/3には煤が付着しており器面には細かい刷毛目調整が施されている。

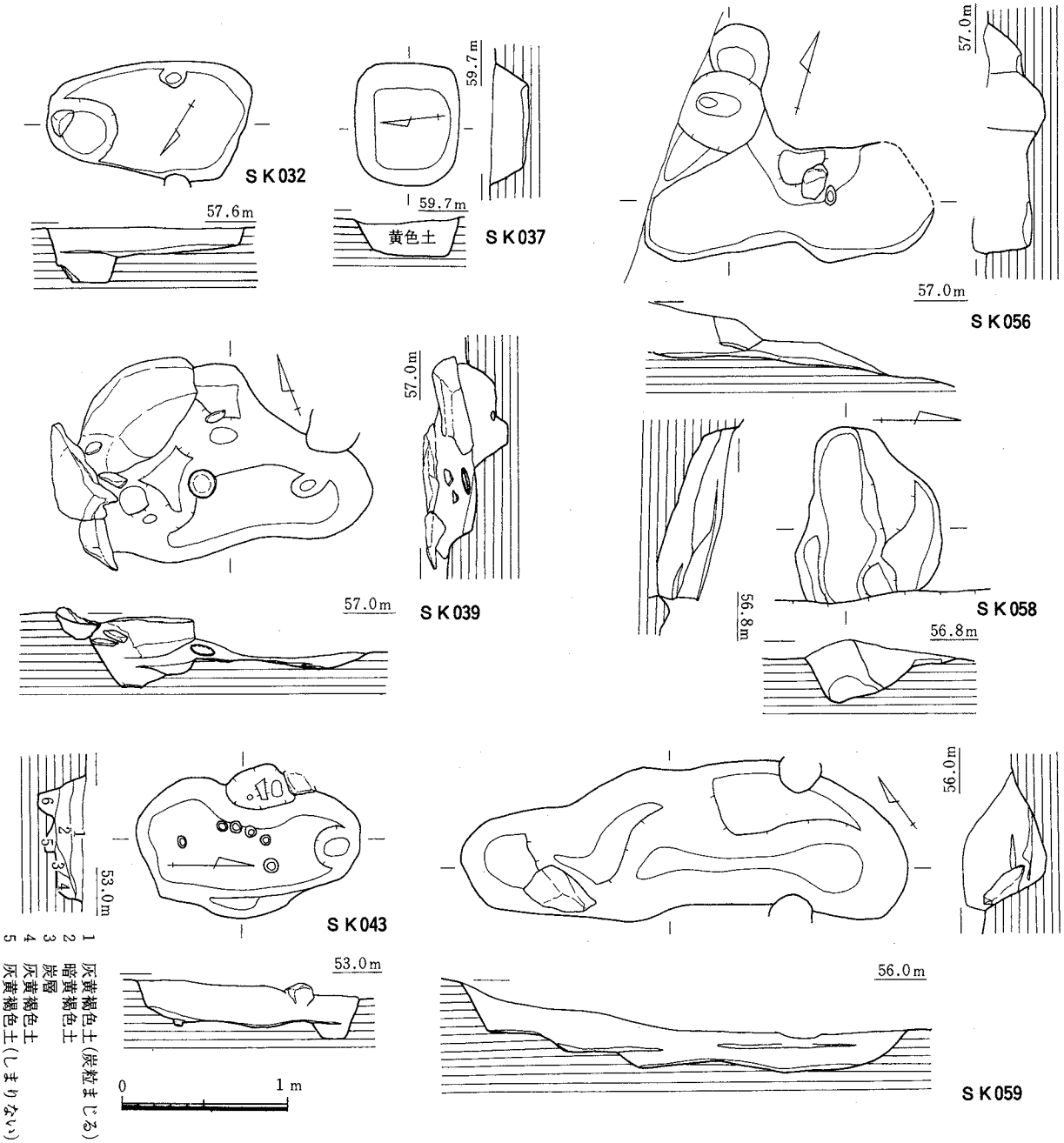
ＳＫ015（第12図） 不整形の土坑で段状に中央が深い。長軸85cm、短軸50cm、深さ27cmを測る。覆土は締まりのない黄褐色土で、焼土が北側に散らばるが炭は見られない。水田の造成で大きく削平さ



第11図 土坑実測図3 (1/40)



第12図　土坑実測図4 (1/40)



第13図　土坑実測図 5 (1/40)

れている位置での検出で、元は60cm以上は深かったものと考えられる。

ＳＫ018（第12図）　縦長の不整形土坑で長軸260cm、短軸120cm、深さ50cmを測る。黄褐色粘質土を覆土とし、下部ほど粘質が強い。堀方は緩やかである。

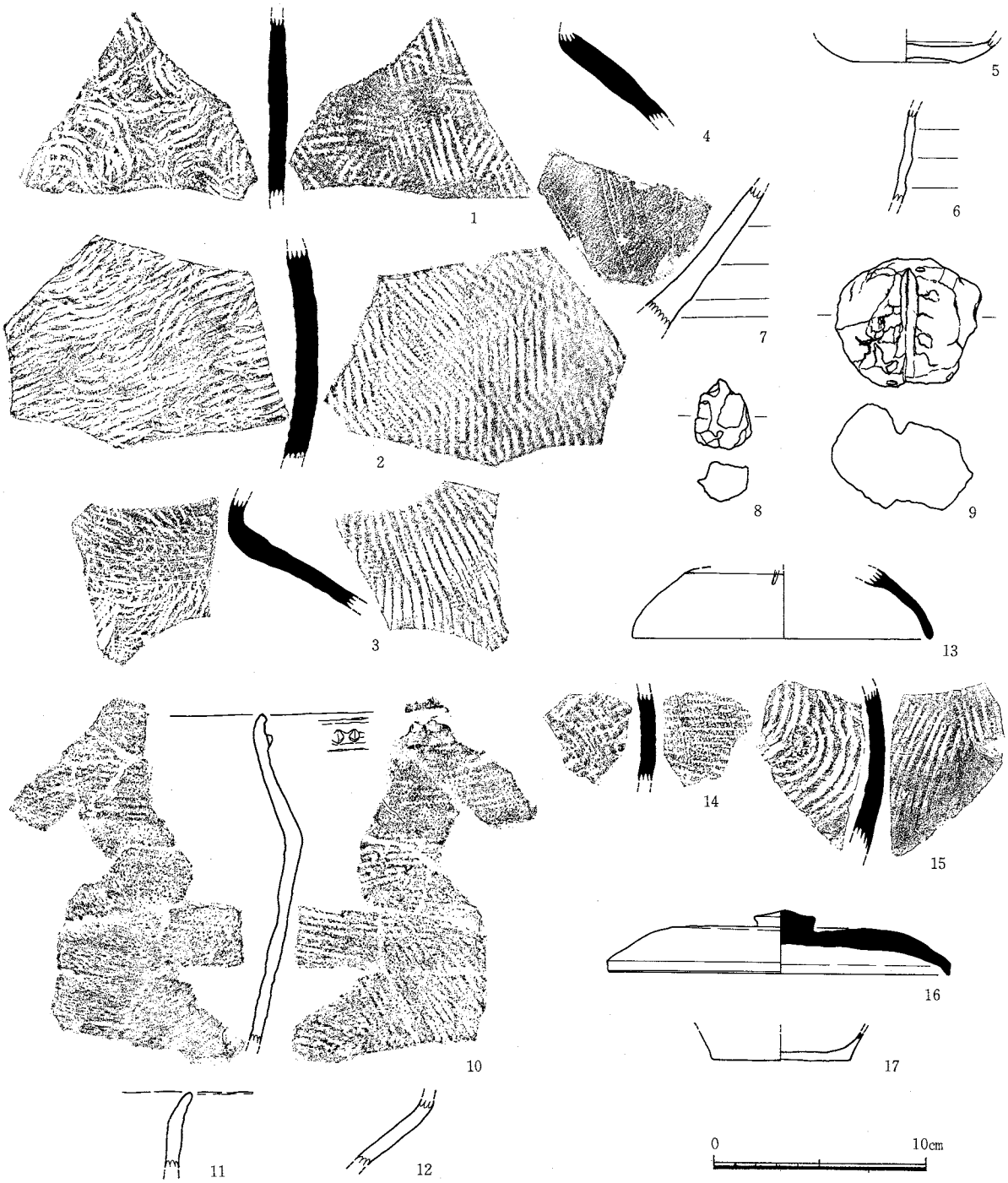
ＳＫ027（第12図）　縦長の不整形土坑で北東側がピット状に深くなる。長軸150cm、短軸90cm、深さ40cmを測る。黄褐色土を覆土とする。

ＳＫ029（第12図）　縦長の不整形土坑で長軸115cm、短軸40cm、深さ30cmを測る。黄褐色土を覆土とする。

ＳＫ030（第12図）　縦長の不整形土坑で長軸180cm、短軸80cm、深さ40cmを測る。黄褐色土が覆土で若干の炭を含む。

ＳＫ032（第13図） 縦長の不整長方形を呈す。長軸120cm、短軸80cm、深さ15cmを測る。締まりのない淡黄色土を覆土とする。自然のくぼみの可能性がある。

ＳＫ034 明瞭な堀方を持たない淡黄褐色土が溜まったくぼみで、縄文土器片が出土した。第14図10から12はＳＫ032からの出土である。10は肩部で屈曲し口縁部端やや下に刻目突帯文を貼付する。肩部の屈曲は鈍く、突帯も刻目もない。内外面とも貝殻条痕を施し、上部は淡灰色から灰色、下部は橙色を呈す。３㎜大までの砂粒を多く含む。11は深鉢の口縁部でわずかに外反する。傾きは不明。３㎜大までの砂粒を含み、種子圧痕が多く見られる。橙色を呈す。12は浅めの鉢の屈曲部になると思われる。器面は粗れている。このほか10数片の縄文土器が出土しているが磨耗している。



第14図 土坑出土遺物実測図(1/3)

ＳＫ035（第12図）　不整長方形の土坑で長軸135cm、短軸90cm、深さ70cmを測る。黄茶色土を覆土とする。堀方は明瞭で立つ。地山の礫の部分で２段になる。床には炭化した木片が出土した。

ＳＫ037（第13図）　方形の土坑で、長軸75cm、短軸65cm、深さ25cmを測る。締まりのない黄褐色土を覆土とする。堀方ははっきりしており急である。ＳＫ001、002に類似する。

ＳＫ039（第13図・第14図）　不整形の土坑で、複数の切りあいの可能性もある。長軸170cm、短軸120cm、深さ30cmを測る。黄褐色土を覆土とする。中央に須恵器の坏蓋が倒置した状態で出土した。第14図16は完形の杯蓋である。全体に紫色がかった灰色を呈す。外面は回転削り、回転ナデの後ナデ調整、内面は回転ナデの後ナデ調整を施す。３㎜大までの砂粒を含む。

ＳＫ043（第13図）　２区の谷部の最下部で検出した。不整楕円形を呈す。長軸135cm、短軸80cm、深さ25cmを測る。床には径７cm、深さ４cm程ののくぼみがあり、北には20cm大のピットが見られる。中世のものと考えられる土師器の小片が出土した。

ＳＫ056（第13図）　不整形の土坑で造成で東側は大きく削平される。東西175cm、南北140cm、深さ30cmを測る。覆土は黄茶色土である。

ＳＫ058（第13図）　東側が削平される。不整楕円形を呈すと考えれる。長軸は110cm以上、短軸80cm、深さ50cmを測る。茶灰色土を覆土とする。

ＳＫ059（第13図）　縦長の不整形土坑で段を成して東に下がる。長軸270cm、幅85cm、深さ50cmを測る。覆土は黄褐色土である。

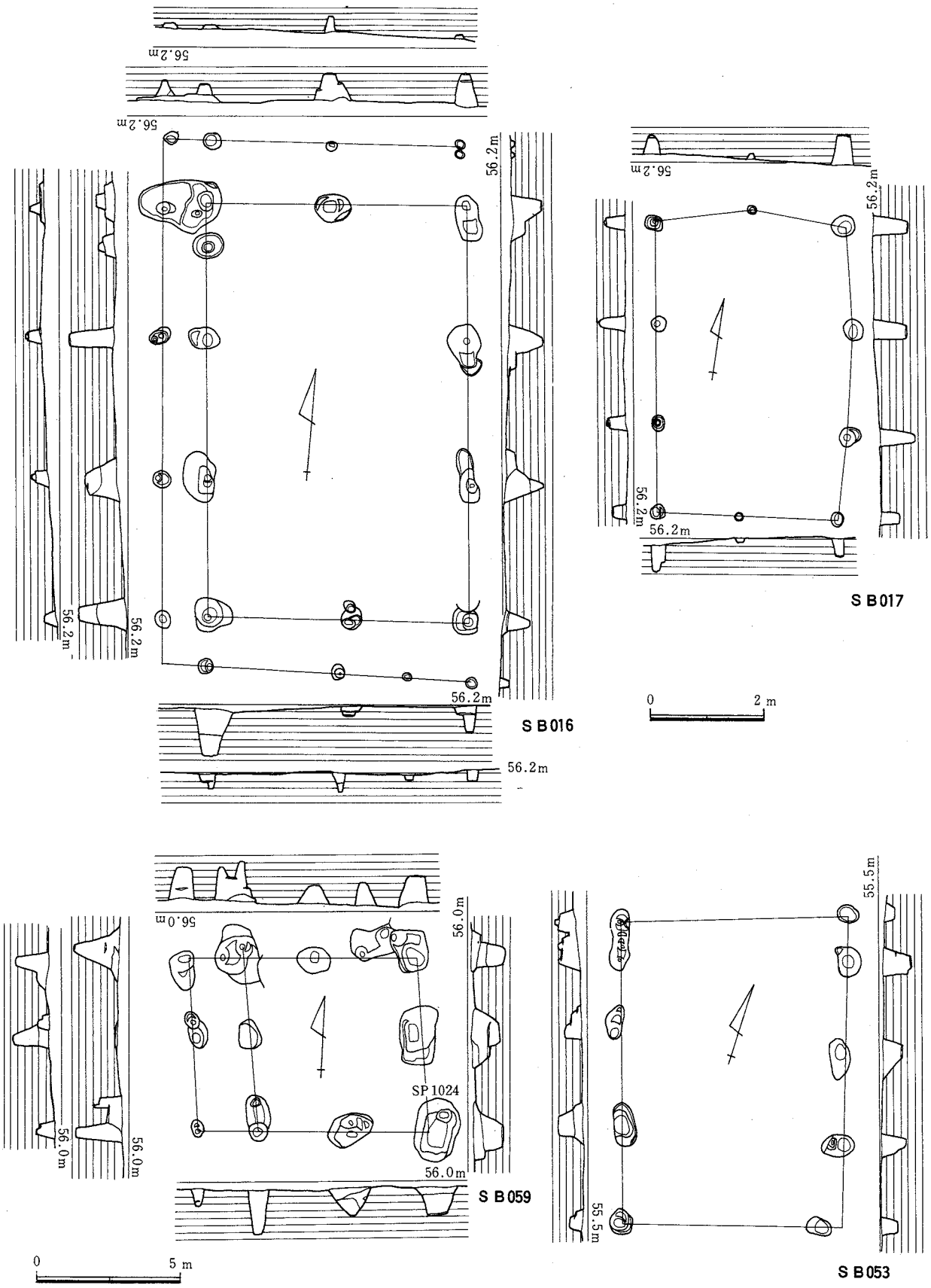
(5)　掘立柱建物

多くのピットを検出したが建物としてきれいにまとまるものは少ない。明瞭な状態で３棟、やや不明確な１棟を確認したが、他にも可能性のあるものがある。

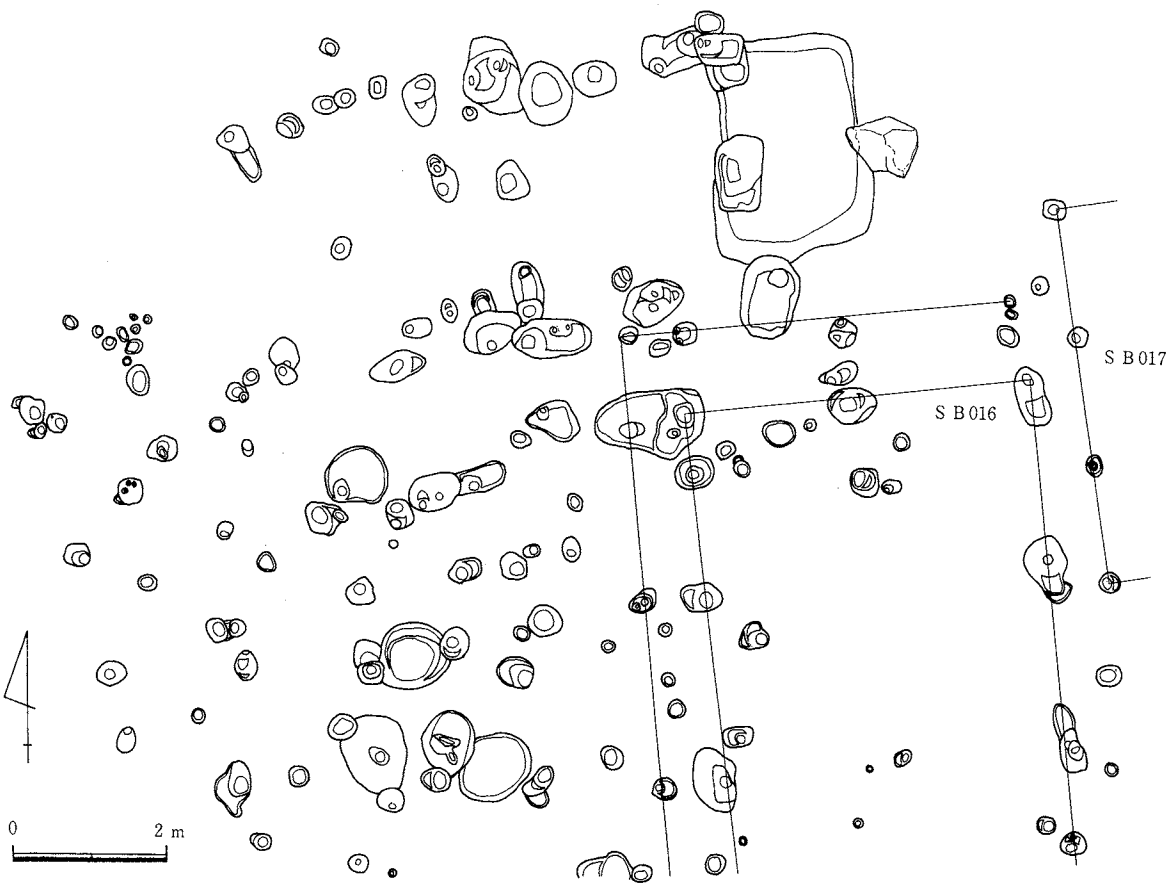
ＳＢ016（第15図）　２間×３間の南北棟である。建物の方位はＮ－7.5°－Ｗ。梁行実長は320cm、柱間は東側がいずれも178cm、西側は150cmを測る。桁行実長は510cm、柱間は170cmのほぼ等間隔である。柱穴掘り方は25cmから40cm円形を呈し、深さ40から60cmを測る。両妻柱は小ぶりで12cmほどで深さも浅い。柱筋はややぶれる。柱穴の覆土は淡灰色で周囲のものと異なり、容易にまとまりを把握できた。南側桁行きの西２つの柱穴の南に対になる位置に柱穴が見られ、張り出しになる可能性がある。遺物は１つの柱穴から土師器片が１つ出土したのみである。

ＳＢ017（第15図）　２間×３間の南北棟である。建物の方位はＮ－6.5°－Ｗ。梁行実長は460cm、柱間は北側が東から240cm、220cm。南側は210cm、250cmを測る。桁行実長は東側が730cm、西側が720cm。柱間は東側の中心が150cm、両側が140cm、西側は148cmのほぼ等間隔である。柱穴掘り方は南北方向に長いものが多く、径15cmほどの柱痕跡が確認できたものもある。深さ35から80cmを測る。柱筋はほぼ紬線にのる。柱穴の覆土は淡灰茶色である。南、北、西には庇がつき、柱と対になる。東側はちょうど庇の位置にＳＢ016があり、方向も同じ事から同時期に存在したと考えられる。南西端には庇の柱穴は検出できなっかった。柱穴は18cmから25cmと小ぶりである。遺物は１つの柱穴から鉄滓が１片出土したのみである。

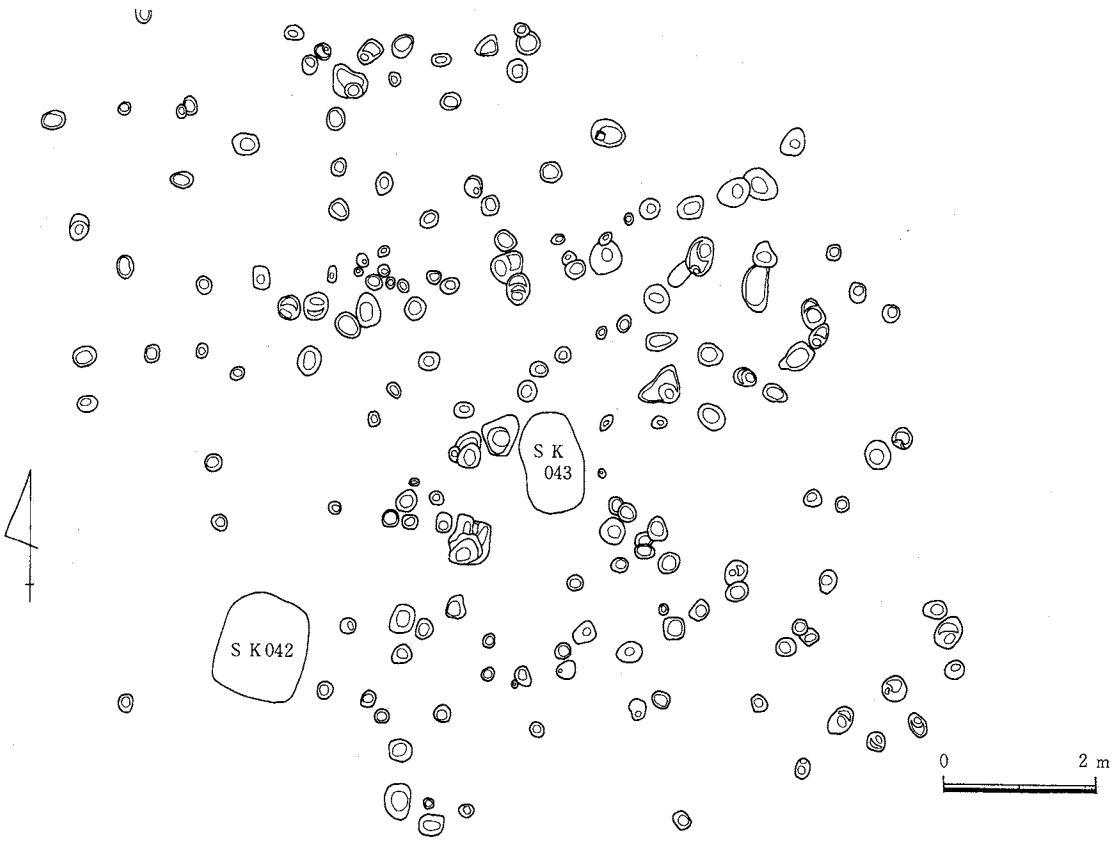
ＳＢ053（第15図）　２間×３間の南北棟と考えられる。妻柱の位置に80cm大のピットがあるが、ややずれており、削平された可能性がある。建物の方位はＮ－15.5°－Ｗ。桁行実長は460cmを測る。柱間は東側北から160、170、150cm、西側180、170、160cmを測る。梁行は南東の柱穴がずれているため北側で400cm南側で350cmを測る。掘り方は南北方向に長い傾向がある。幅25cmほどである。深さ30から40cmを測る。柱筋は２、３のらないものがある。柱穴の覆土は淡灰茶色である。やや西に振れるがＳＢ017と一連のものと考えられる。遺物は出土していない。



第15図　掘立柱建物実測図(1/100)



第16図　ピット集中部平面図１(1/100)



第17図　ピット集中部平面図２(1/100)

ＳＢ059（第14図・第15図）　ＳＢ017の北西に隣接して大降りで掘り方も深いピットが並ぶがうまくまとまらない。その中から図のように拾ってみた。２間×２間で方位はＮ－７°－ＷでＳＢ017とほぼ同じになる。１辺の実長は300cmを測る。柱穴は径30から100cm、深さ40から80cmとばらつきがある。柱筋はややぶれる。柱穴の覆土は淡茶褐色土が多い。西側に対になる位置に柱穴が見られ、張り出しになるとも考えられる。遺物はＳＰ1024から土師皿第14図17が出土した。器面の粗れのため調整等は不明である。胎土は砂粒をほとんど含まず、口径８cm弱になると思われる。

このほかに集中してピットが並ぶ箇所を第16、17図に示した。第16図はＳＢ059の周辺で、柱痕跡を持つものや、掘り方が大きく深いものが多い。第17図は谷部でピットはやや小ぶりだが筋が通り間隔が一定で何らかの建物があったものと思われる。

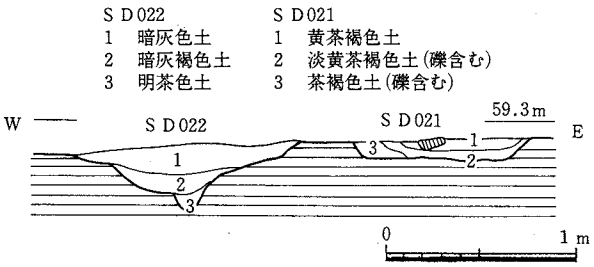
(6)　溝

２区の北端から２条の浅い溝がほぼ並行して見られた。２つの溝は検出した範囲では切り合いはないが、間隔が一定せず狭いことから一つの溝の付け替えの可能性がある。覆土はＳＤ021は灰褐色土、ＳＤ022は黒に近い暗褐色土でやや異なる。ＳＤ021は底に鉄分が沈着しており、段落ちより下では鉄分のみ検出した。漆椀を漆のみの遺存であるが検出した。

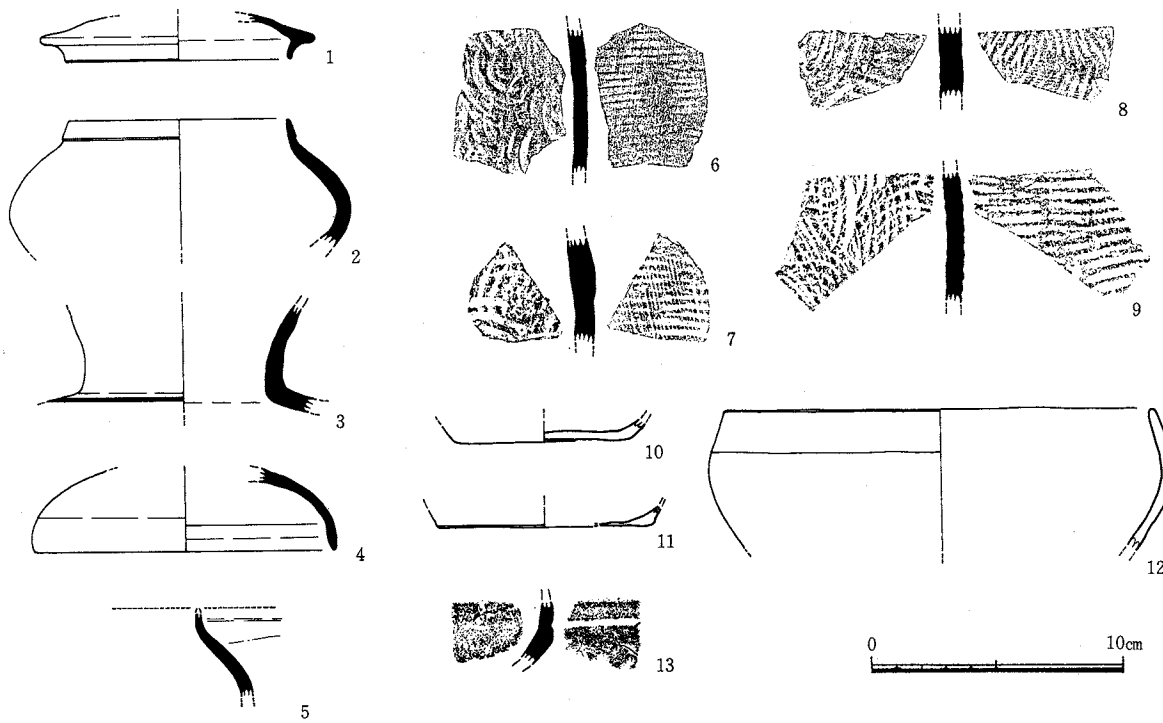
(7)　その他のピット

掘立柱建物を確認した周辺および谷部を中心に多数のピットを検出した。明確に建物としてまとめることはできないが、並びそうなものがある。

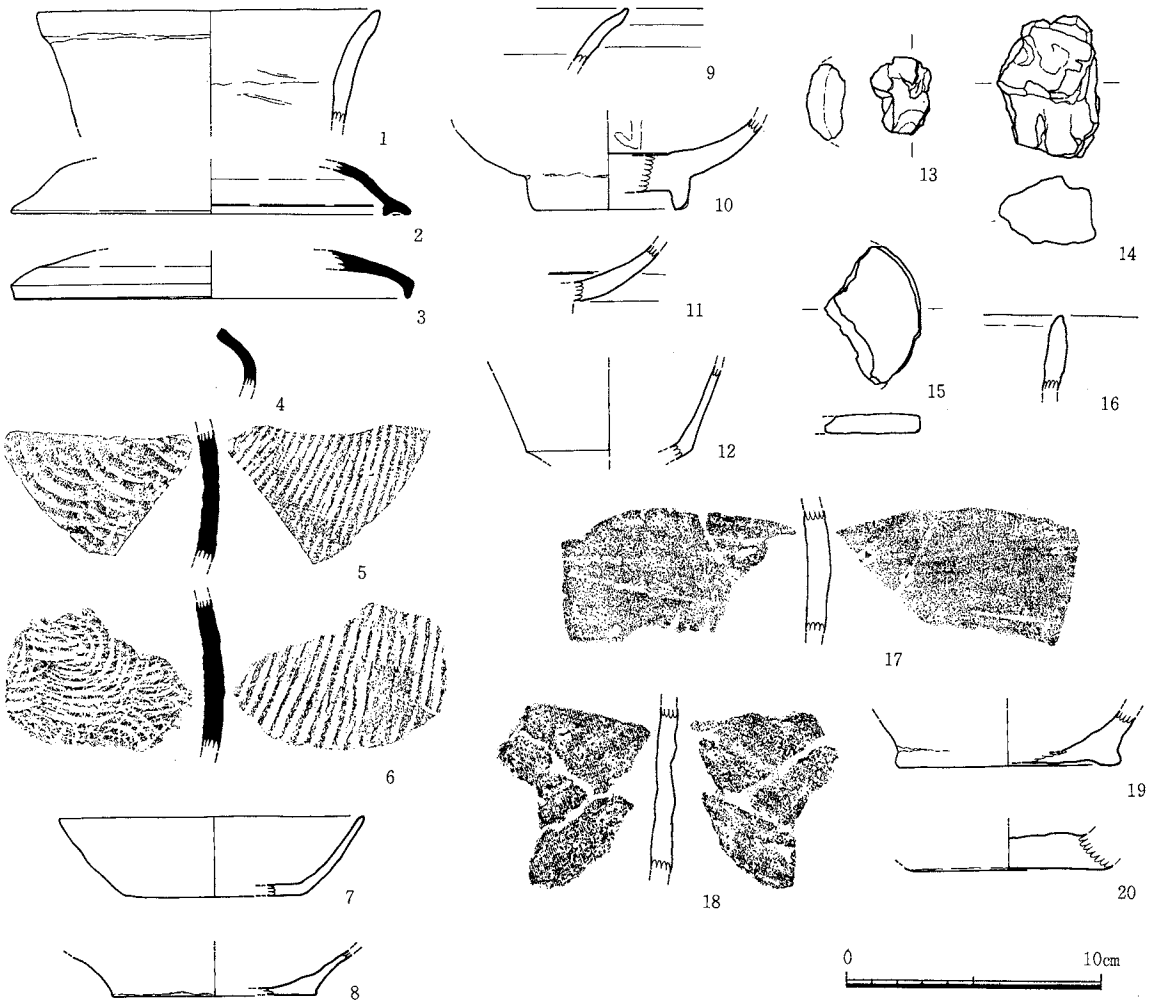
第19図はピットからの出土遺物である。１から９は須恵器である。１は蓋で1/5からの復元



第18図　溝土層断面図(1/40)



第19図　ピット出土遺物実測図(1/3)

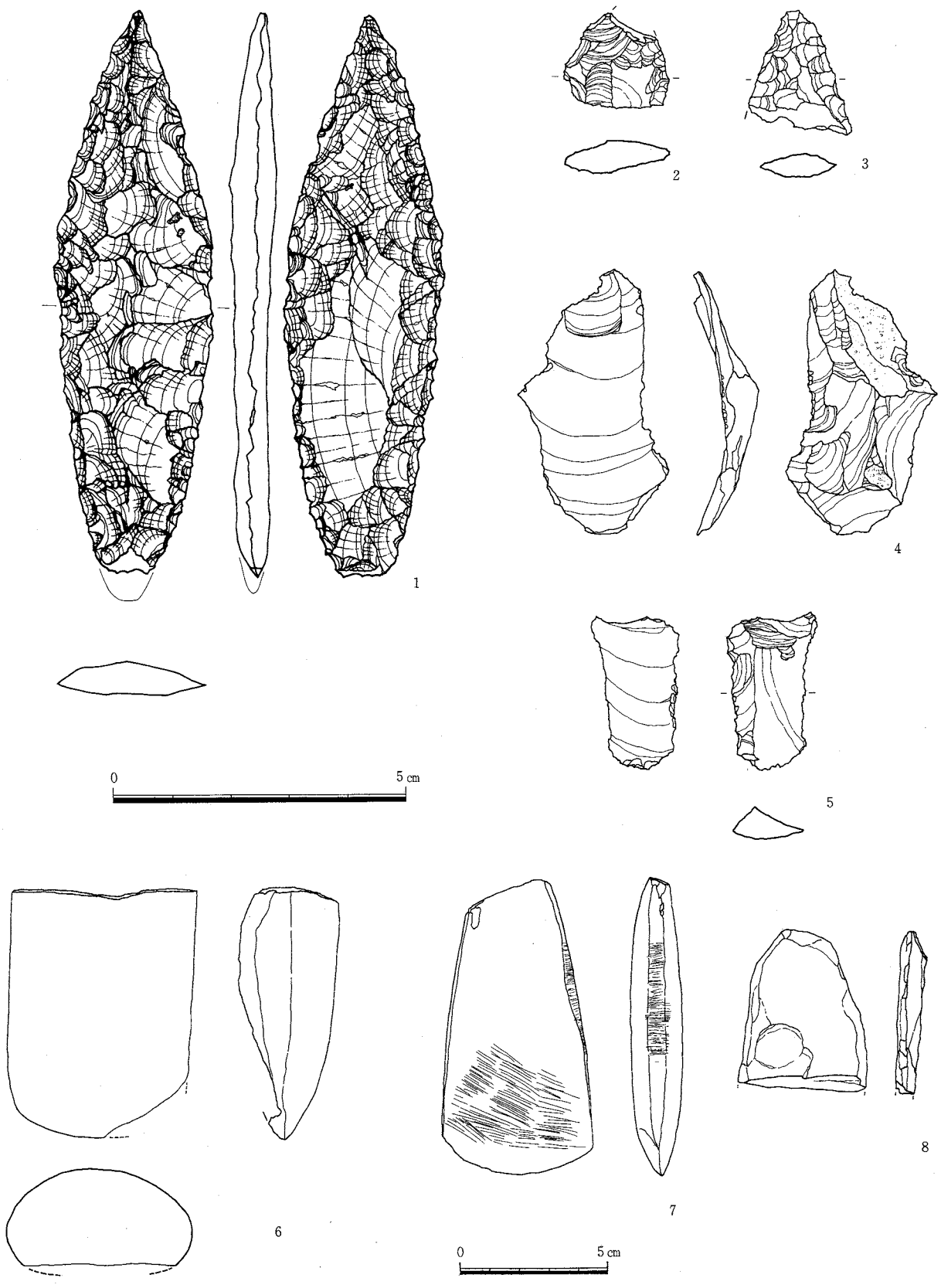


第20図　包含層出土遺物実測図１(1/3)

口径は10.8cmを測る。胎土には砂粒が少なく、回転ナデ調整を施す。天井部にはつまみが付くものと思われる。２はで口縁部直下に低い段がある。胴部上半には掻き目を施し、内面は回転ナデ調整である。1/4からの復元口径は8.4cmを測る。３はいわゆる似非須恵土師器である。胎土に砂粒をほとんど含まず黄白色を呈す。器面は磨耗しており調整は不明。1/4からの復元である。４は杯蓋で1/6からの復元口径は12cmを測る。内面は回転ナデ調整、外面はナデ調整を施す。また外面は黒色、内面は淡青灰色を呈す。５は無頸壺で回転なで調整を施す。外面は灰で暗灰色に変色する。６から９は甕の胴部である。外面に平行叩きまたは疑似格子目文叩き痕が、内面に同心円状当て具痕が残る。７、８には外面に掻き目が見られる。６は内面を当て具痕が低く、ナデ調整が施されている。10、11は土師皿である。器面が粗ているが、10は糸切り痕がわずかに残る。12は土師器の鉢で1/2弱が残存する。口縁は軽く内湾し、緩やかに屈曲して胴部にいたる。１mm大の砂粒を含むが胎土は細かい。内面は丁寧なナデ調整、外面は回転ナデ調整の後、化粧土を施している。13は深鉢の口縁部で口唇部を欠く。口縁帯に２条の沈線を施す。粗ており調整ははっきりしないが丁寧なナデもしくは研磨調整と思われる。茶色を呈す。

(8)　包含層およびその他の遺物

遺構検出面で縄文土器を採集したため、その周辺に包含層の存在を予想し、谷部の一部を掘り下げた。数点の縄文土器は出土したものの、その量は少なく、土師器も混じる箇所があるなど良好な包含層を確認する事は出来なっかた。ここでは、上記の堀下げ時、遺構検出時に出土した土器（第20図）



第21図　包含層出土遺物実測図２（1/1・1/2）

と、全調査地点で出土した石器を一括して記述する。

第20図１はいわゆる似非須恵土師器で甕の口縁部にあたる。約1/5からの復元口径は13.4㎝を測る。器面はやや粗れるが、ナデ調整と思われる。内面には擦過痕が残る。外面は２次焼成により淡橙色、内面は茶褐色を呈す。２、３㎜大の砂粒を含む。２から６は須恵器である。２は杯蓋で返しがつく。

1/4強からの復元口径は15.8cmを測る。3も杯蓋で回転ナデ調整で内面にはナデを施す。1/8からの復元口径は16cmである。4は無頸壺でナデ調整を施す。5、6は甕の胴部で外面に疑似格子目叩き痕、内面には同心円叩き痕が見られる。7、8は土師皿である。7は調整等は不明だが、ヘラ切りの可能性がある。橙色を呈す。8は糸切り底で黄色を帯びた灰白色を呈す。9は青磁の口縁部で細かな貫入が入る。10は青磁の椀でにぶい淡緑色の釉を施す。内面底部と見込みは露胎である。11は白磁の椀で外面下部は露胎で内面には1条の沈線を施す。12は白磁で近世のものである。13、14は粘土塊である。谷部で出土した。13は小さ方で8gを量る。図示した断面の左側は暗灰色から黒色に変色している。14はその中でも大きなもので60gを量る。2mm大の砂粒を含み淡茶色を呈す。15は破面からして土板と考えられる。2mm大までの砂粒を多く含む。深鉢の胴部の加工品か。16は深鉢の口縁部で器壁が厚い。ナデ調整で器面に細かな気泡が見られる。17は深鉢の胴部で外面に条痕、内面には擦過痕が見られる。1mm大の砂粒を多く含む。18は深鉢の胴部で外面は削りにより凹凸があり、内面には擦過痕が見られる。3mm大までの砂粒を多く含む。茶褐色を呈す。19、20は深鉢の底部で19は台形底になり、わずかに上げ底になる。1mm大砂粒を多く含み淡黄褐色から橙色を呈す。20は2mm大までの砂粒を含む。外面は橙色、内面は淡黄灰色から暗灰色を呈す。

第21図の石器は遺構、特定の層位には伴わない。1は古銅輝石安山岩の石槍である。横長剝片を素材とし、裏面に主剝離面を残し、縁辺に比較的丁寧な剝離加工を加え、尖端を意識し尖らせる。基部は一部破損しているが、丸く仕上げたと考えられる。縄文早期でも早い時期のものか。器長9.7cm(10.2cm)、器最大幅2.7cm、最大厚0.8cmを測る。2は黒曜石製で石鏃と思われる。先端部が欠ける。不規則な調整が施される。現存長1.6cm、幅1.8cm、厚さ0.6cmを測る。3は安山岩製の石鏃で基部が欠ける。現存長2.1cm、幅1.8cm、0.4cmを測る。4、5は黒曜石の剝片石器である。細かな2次加工もしくは刃こぼれがわずかに見られる。6から8は磨製石斧である。6は玄武岩製である。片面が剝げ、器面は風化している。現存長8.5cm、幅6.3cm、厚さ3.3cmを測る。7は流文岩製で基部がわずかに欠く。器面は極めて平滑に仕上げる。刃は表にした方が角度が大きい。刃から4cmに斜方向の傷が多くはいる。裏側は、表と比べて浅く細かい傷が刃に沿って5mm入り、体部中央部までさらに浅い傷が斜方向に入る。側面には表の傷がない部分と基部から2.5cmに横方向の傷が入る。柄との装着と関連あるものか。8は玄武岩質である。基部のみの残存で裏面は剝離する。体部は磨きにより平らだが、側部は打裂による調整のままである。現存長5.5cm、幅3.5cmを測る。

3　小結

1次調査では縄文、古墳時代、古代、中世の遺構、遺物を検出した。

縄文時代は遺物のみである。最も古いものは第21図1の石槍で、縄文早期でも古い時期に遡る可能性がある。他に同時期を示す遺物は見あたらない。次に明確に時期がわかる資料としては、第14図10の刻目突帯文土器があげられる。刻目突帯文単純期のものである。ＳＫ34からは浅鉢状の破片も出土しており、同時期のものといえよう。このような遺物が散見されたため、遺構もしくは包含層の精査に努めたが検出できなかった。縄文土器と考えられる土器片は図示した以外にも出土しているが、摩耗がはげしく小片で量も少ない。調査地点は大きく削平を受けており、縄文期の遺跡の広がりは、むしろ南側丘陵の緩斜面にあると予測される。

古代については、グランド造成時の採集品の他はＳＫ０３９の坏蓋他数点のみである。古墳の遺物の可能性もあるが、グランド部分のやや緩傾斜地に他の遺構が小規模ながら存在したとも考えられる。掘立柱建物は土師皿片が微量出土したのみで堀方の様子等からしても中世のものであろう。明確に拾えた掘立はほぼ一カ所に集中しており、方位も近い事から同時期もしくは近い時期のものでろう。まとまりを確認できなかったピットは多数あるが、小規模な建物が複数時期に少しずつ建てられたものと思われる。

Ⅲ　古田遺跡第２次調査の報告

１　調査の概要

本調査区は公園建設に伴う調査である。1995年４月６日にグランド部分の試掘を行ったが、試掘の結果、グランド造成土の下に遺構が確認されたので５月10日から調査を行い、６月26日に終了した。工事に関わる面積は3800㎡、調査面積は1010㎡である。試掘の結果ではグランドの南側は削平のため遺構が確認できず、また西端部に設定したトレンチでは、１次でも確認された南北にのびる深い谷を確認した。覆土は締まりがなく、中層まで近代の塵が混じっているのが判明したので、調査はグランドの北東部分に限定して行った。その後、調査区の西端で火葬関連施設を検出したので西側に拡張したところ、谷に沿って１基の焼土坑と２基の火葬関連施設を確認した。

調査区の遺構検出の際、赤橙色の地山と考えていた粘質土から縄文土器と思われる破片を１点検出したので調査区全体に任意に２ｍ×２ｍのグリットを17カ所設定し、黄褐色の粘質土と赤橙色の粘質土を掘り下げたが、遺物は出土していない。調査期間は梅雨にあたり、グランド面から最大２ｍほど掘り下げている調査区は雨の度にプール状態になり、調査は困難であった。

２　遺構と遺物

(1)　溝

SD001（第25図）　調査区の中央を南北に流れる。削平が激しい。北端のみ幅が広くなっている。上層は暗褐色土で炭化物を含み、南側と似た感じの土であるが下層の堆積が南側と異なるので別の遺構の可能性が高い。覆土は北側は底面直上は黒褐色の粘質土で水が溜まっていた状況を示している。南側では地山ブロックを含む褐色土で水が流れた痕跡はみられない。断面は北端で幅268㎝、深さ54㎝、南側で幅100㎝前後、深さ約14㎝を測る。断面は浅皿状である。南端部で２条に分岐する。１条は西側にそれ、段々と浅くなり、西端部で消滅する。SK011を切り、SK012に切られる。出土遺物はないが併走するSD002から古代～中世の遺物が出土しており、それとほぼ同時期と思われる。

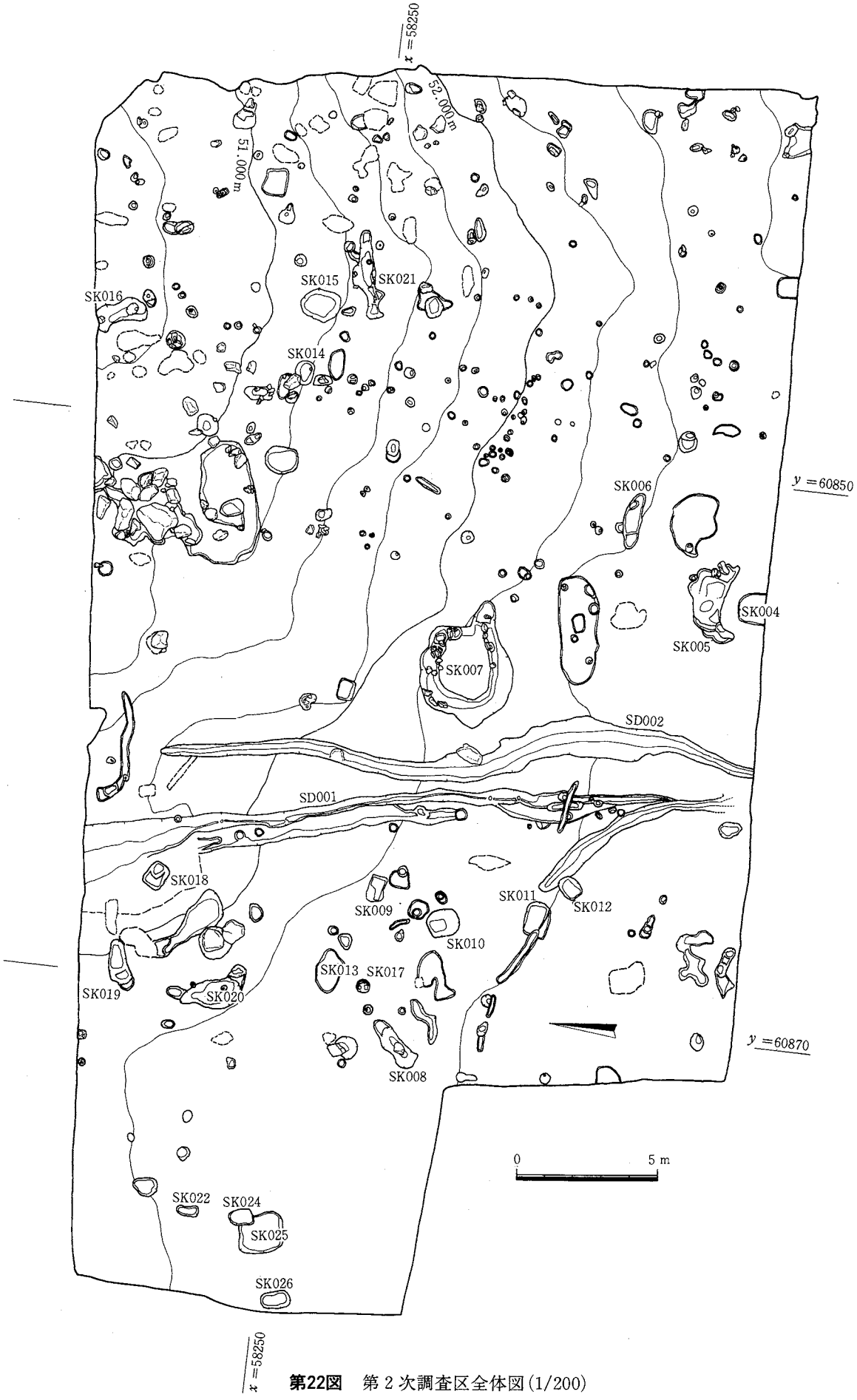
SD002（第22図）　SD001の東側を併走する。調査区南側でやや太くなるが、北側では細くなり、北端部で消滅する。幅約60㎝、深さ10～20㎝を測る。断面は逆台形である。覆土は灰褐色の粘質土で水が滞水していた痕跡がみられるが、砂は含まない。７世紀末～８世紀の須恵器坏蓋片や土師皿、白磁片、黒耀石剝片などが出土している。

(2)　土坑

SK005（第23図）　SK004の北側に位置する。平面形は東西に長い不整形を呈し長径205㎝、短径101㎝、深さ42㎝を測る。東西両側にテラスを持ち、中央に隅丸方形の掘り方をもつ。遺物は出土していない。

SK006（第23図）　調査区の南側に位置する。平面形は東西に長い溝状を呈す。長径144㎝、幅47㎝、深さ28㎝を測る。東側にテラスをもち、西側に円形の掘り込みをもつ。南北断面は浅皿状を呈す。遺物は出土していない。

SK007（第24図）　調査区中央に位置する。平面形は隅丸の方形を呈し、長径213㎝、短径244㎝、深さ24㎝を測る。東側を除く３方に幅33㎝から60㎝の溝が巡る。床面からの深さは７～20㎝を測る。溝の中には20㎝前後の礫が入っている。古墳の残骸の可能性も考えられる。床面まで近現代の削平をうけており、覆土は灰褐色の耕作土である。その中から染め付け、白磁片、鉄滓等が出土している。周囲に50～80㎝程の礫が散乱していた。周辺の住民の話によるとグランド造成以前は遺物が分布して



第22図　第２次調査区全体図(1/200)

おり、本報告書の位置と環境に載せているが、7世紀代の須恵器の坏等が出土している。1次調査区で確認された古田1号墳は出土した鉄製鋤先から7世紀前後の古墳と考えられる。周囲に古墳群が存在した可能性がある。

SK008（第23図） 調査区の西側に位置する。平面形は東西に長い溝状を呈す。長径158cm、短径49cm、深さ26cmを測る。東側にテラスをもつ。覆土は黄褐色の粘質土で中央に40cm程の礫が出土している。遺物は出土していない。

SK009（第23図） 調査区の西側に位置する。平面形は長方形を呈し、長径69cm、短径43cm、深さ67cmを測る。底面はL字形を呈す。断面はU字状を呈し、覆土は暗黄褐色の粘土である。出土遺物なし。

SK010（第23図） 調査区の西側に位置する。平面形はやや方形を呈す。南側は丸みを帯びる。径は76cm、深さ28cmを測る。断面は浅皿状を呈す。覆土は黄褐色粘質土で地山との区別は不明瞭である。遺物は出土していない。

SK011（第23図） 調査区の西側に位置する。平面形は長方形を呈す。東片はやや丸みをもつ。SD001から分岐した溝に切られる。南側に浅いテラスをもつ。覆土は暗黄褐色粘質土で地山との区別はつきにくい。遺物は出土していない。

SK012（第22図） 調査区の西側に位置する。SD001から分岐した溝を切っている。平面形は長方形を呈す。断面は逆台形を呈す。出土遺物はない。

SK013（第23図） 調査区の西側に位置する。平面形は不整の楕円形を呈し、長径117cm、短径65cm、深さ11cmを測る。断面は浅皿状を呈し、覆土は黄褐色粘質土である。出土遺物なし。

SK014（第23図） 調査区の東側に位置する。平面形は不整の楕円形を呈し、長径65cm、短径49cm、深さ5cmを測る。断面は浅皿状を呈す。覆土は単層で、黒色土を呈し、炭化物を多く含む。須恵器の甕片が出土している。

SK016（第23図） 調査区の北端に位置し調査区外に延びる。平面形は鉄アレイ型を呈し、現状で長径178cm、短径93cm、深さ39cmを測る。東西断面は逆台形を呈す。北端に25cmの礫を含む。出土遺物なし。

SK017（第22図） 調査区西側に位置する。平面形は円形を呈し、径46cm、深さ55cmを測る。北東と南側にテラスをもつ。遺物は出土していない。柱穴と思われる。

SK018（第23図） 調査区の中央北側に位置する。平面形は長方形を呈し長径71cm、短径53cm、深さ37cmを測る。東側に円形の掘り込みがある。覆土は褐色の粘質土である。出土遺物なし。

SK019（第23図） 調査区の北側西寄りに位置する。平面形は東西に長い溝状を呈し、長径139cm、短径53cmを測る。西側にテラスを2つもち、断面は逆台形を呈す。覆土は暗黄褐色粘質土で地山との区別はつけにくい。炭化物の小片を多く含んでいる。

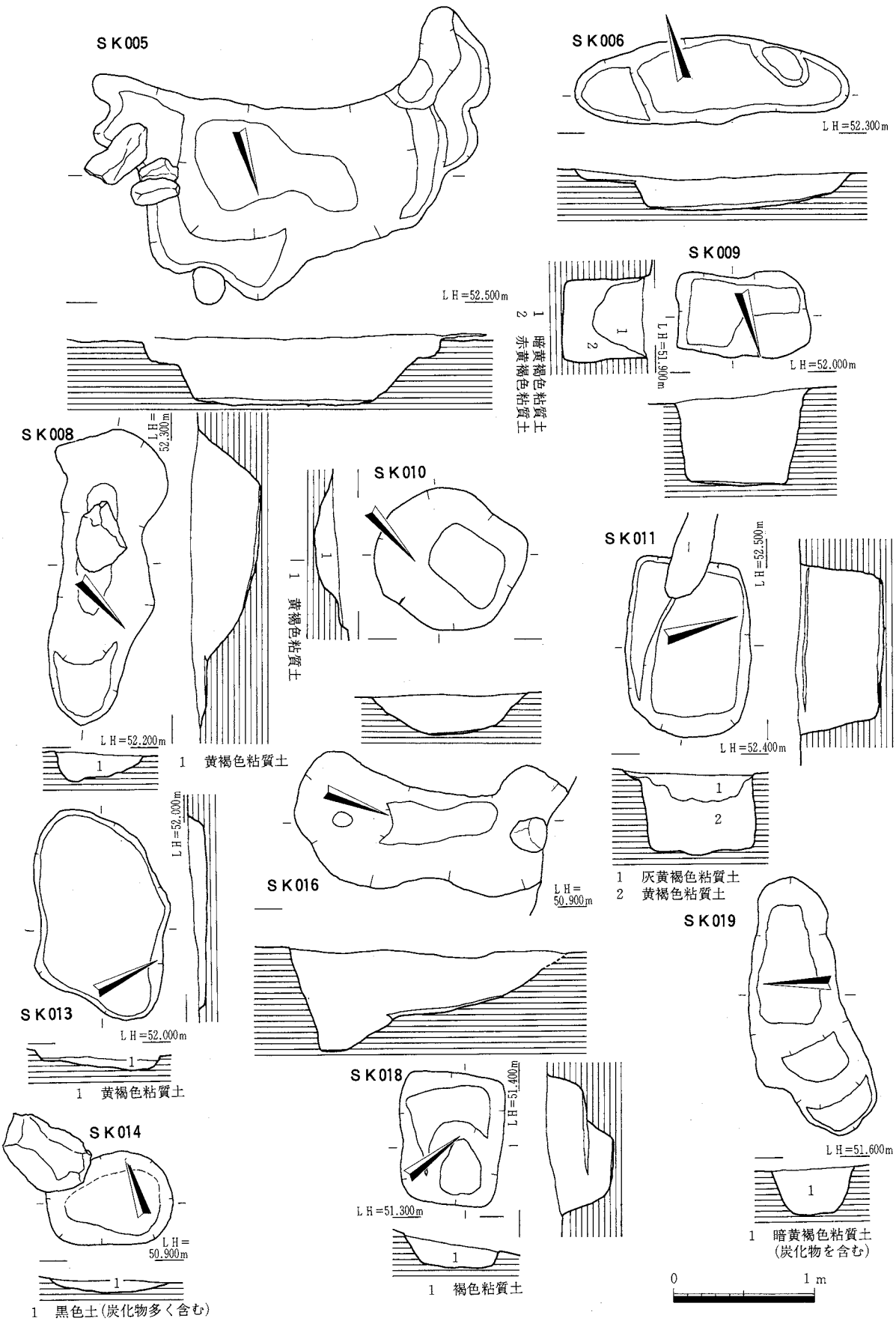
SK020（第24図） 調査区の西側に位置する。平面形はいびつなL字型を呈し、長径195cm、短径75cm、深さ21cmを測る。南東側に拡張部をもつ。南東隅に円形の掘り方が見られるが、別のピットと思われる。覆土は暗黄褐色の粘質土で炭化物の小片を含んでいる。出土遺物はない。

SK021（第24図） 調査区の東側に位置する。平面形は東西に長い溝状を呈し、長径239cm、短径33cmを測る。東西両側にテラスをもつ。南北断面は逆三角形を呈す。覆土は暗黄褐色の粘質土で炭化物の小片をわずかに含んでいる。出土遺物はない。

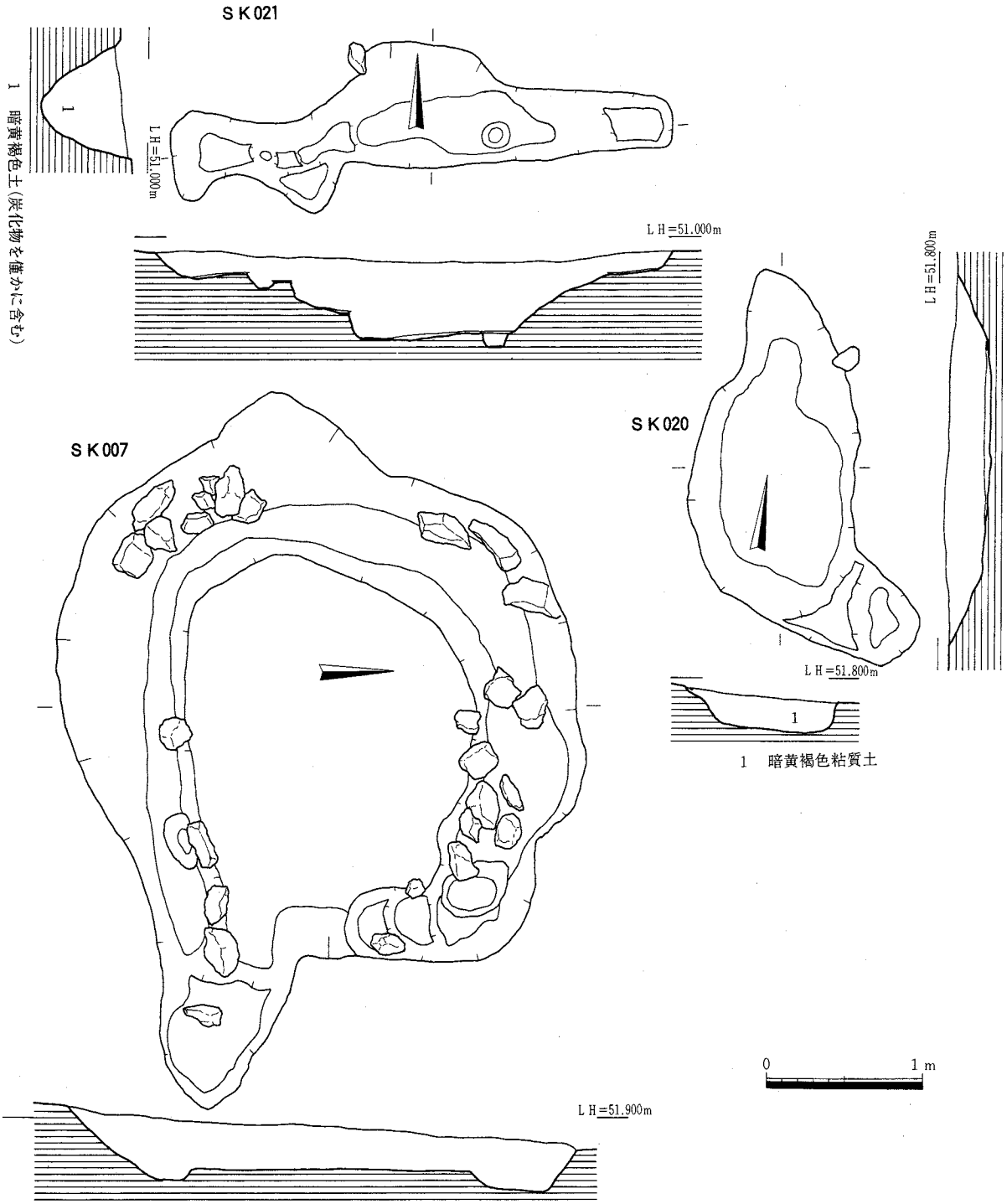
(3) 焼土坑

調査区で2基検出した。

SK015（第25図） 調査区の東側に位置する。平面形はややいびつな五角形を呈し、長径139cm、



第23図　土坑実測図1 (1/40)



第24図　土坑実測図２(1/40)

短径115cm、深さ39cmを測る。断面は逆台形を呈す。壁は３カ所が焼けて赤変しているが、床面近くから上までよく焼けている。床面は焼けていない。覆土はレンズ状の堆積で床面上に８cm程の粉上の炭化物を含むほか、上層も炭化物を多く含んでいる。出土遺物はない。

SK025（第25図）　調査区の西端に位置する。SK024に切られる。平面は隅丸の長方形を呈し、長径174cm、短径137cm、深さ36cmを測る。北側に掘り込みをもつ。３方の壁が焼けて赤変している。赤

変部分は壁の上から下まで及び、厚さも3㎝を測る。床面は赤変していない。覆土はレンズ状の堆積で床面直上に粉状の炭化物が堆積している。出土遺物はない。

(4) 火葬関連施設

調査区の西側で3基検出した。

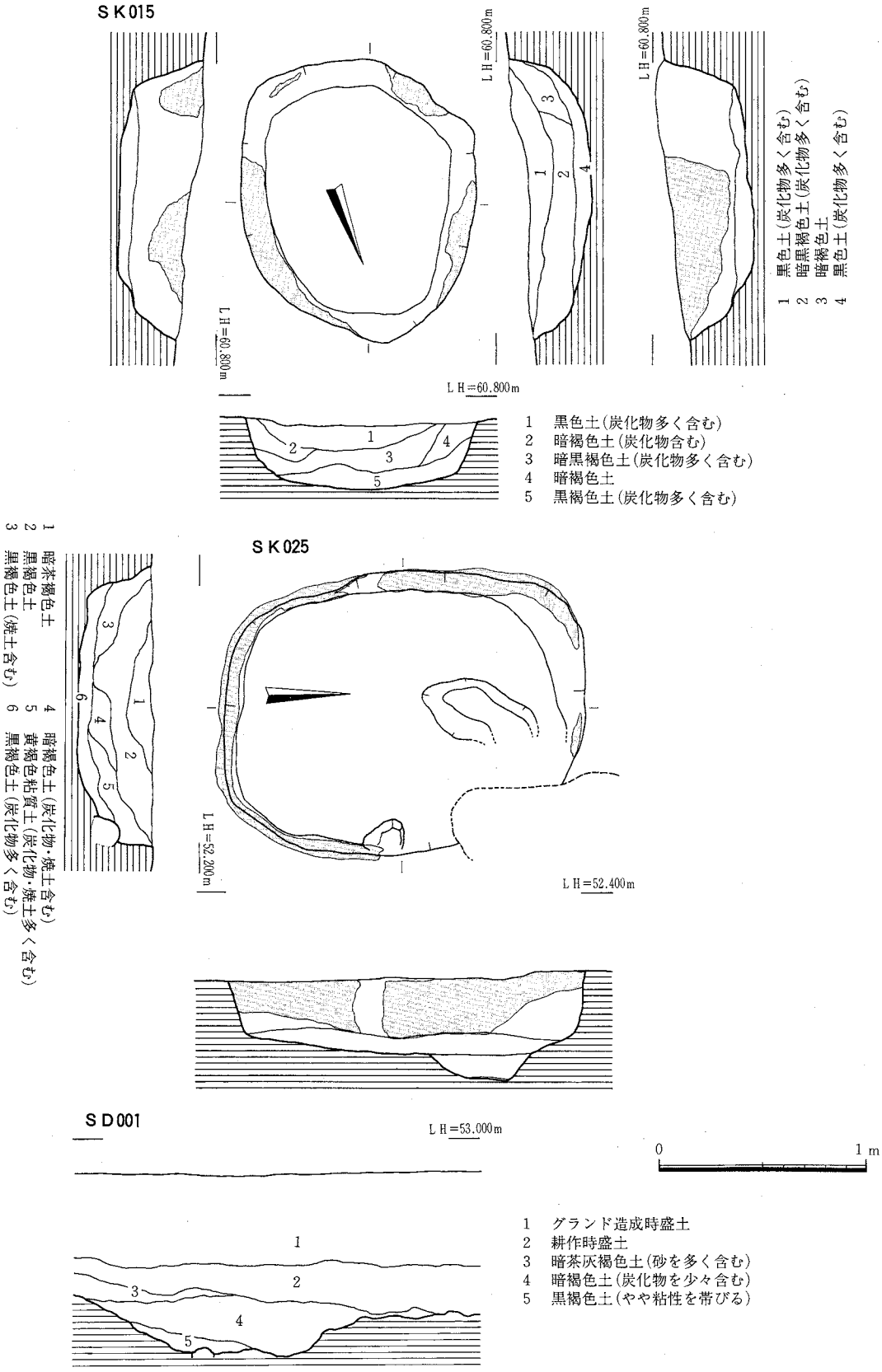
SK022（第26図） 隅丸の長方形を呈し長径131㎝、短径77㎝、深さ29㎝を測る。断面は箱形を呈す。壁、床面共に熱で赤変していた。土坑中に50㎝程の石を2つ確認したが1つは床面直上で石の下は焼けていなかったので、火葬時から動いてないものと考えられる。北側の石はやや浮いており、炭化物層の上に乗っている。炭化物層は北側の石の下を除く遺構内全体に堆積している。骨片を含む黄褐色粘質土は南側の石を包むように堆積している。上層は炭化物を僅かに含む暗茶褐色土でその下に4㎝程の炭化物層があり、その上面に幅8㎝程の炭化した板材が3枚重なっており、周辺に10㎝の炭化物が集中している。南西隅には35㎝×20㎝の範囲に骨片が分布し、長さ8㎝ほどの細長い骨が見られる。その下に骨片を全く含まない粘土層を挟んで骨片を多く含む粘土層になる。骨を含まない層を挟むことで、火葬が数回にわたる可能性も考えられる。出土遺物はない。

SK024（第26図） 長軸を南北にとる隅丸の長方形を呈し長径137㎝、短径76㎝、深さ32㎝を測る。断面は箱形を呈す。壁は厚さ6～8㎝と厚く焼けている。床面に径19㎝から34㎝の礫を2つずつ3列にならべている。床面も焼けて赤変しているが、石の下も赤変が著しい。石は床に貼り付いており、間層はなかった。上層は黄褐色土で焼土・炭化物を多く含む。骨を多く含む黄褐色粘質土は中層の中心部と下層に堆積しており、中層では長さ12㎝ほどの骨をふくんでいた。最下層は骨を含まない炭化物層である。SK022と同様に骨を含まない中間層がみられる。骨を多く含む層は礫の上に堆積しており、礫を敷いた後、火葬を行っている。

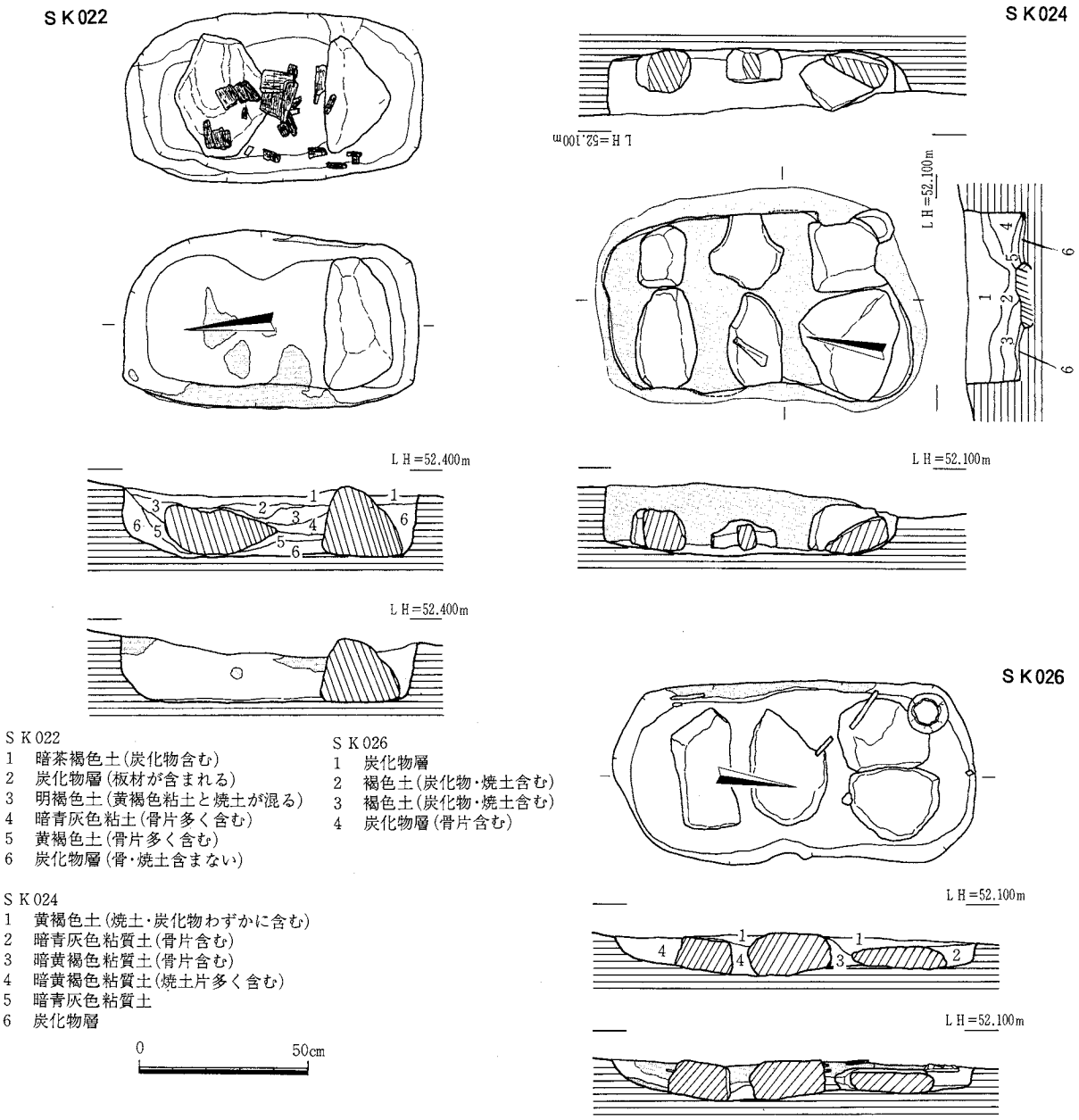
SK026（第26図） 南北に長い隅丸の長方形を呈し長径108㎝、短径54㎝、深さ12㎝を測る。断面は浅皿状を呈す。壁と床面の一部が熱で赤変している。床面に径30～40㎝ほどの平らな石を5個敷いている。覆土は上層が骨と土器片を含む炭化物層である。最上層に長さ13㎝の細長い骨片や径4㎝の骨片を含む。下層は北側が炭化物や焼土を含む褐色土層、南側は骨片を含む炭化物層である。北側は床面から褐色土で床面直上に大きな骨片を含んでいた。土坑の北西隅の炭化物層から土師器椀が出土した。口径12㎝を測る。伏せた状態で出土しており、削平によって下半部は削られている。

小結

調査区全体で不整形の土坑を多数検出した。覆土は暗黄橙色の粘質土と暗赤黄褐色土の2種類があったが、どちらも地山と土色が似ており、地山との区別は明確ではない。遺物も出土しておらず、時期や人為的なものであるかは不明である。調査区中央北側に径80～120㎝を測る礫の集中部分があり、1次調査と同様な古墳の残骸と思われたので、周囲にトレンチを入れたものの、床面や周溝は確認できなかった。ただ、SK007が石室の残骸であれば、石室の構築材であった可能性は考えられる。調査区中央を流れるSD001・SD002も自然流路である可能性が高く、明確な遺構は2基の焼土坑と3基の火葬関連遺構のみである。焼土坑は大型で壁は厚く赤変しているが、床は全く赤変していない。遺物は出土していない。火葬関連遺構に切られているので、中世前後まで遡ると考えられる。火葬関連遺構は3基検出したが、主軸をほぼ同じくし、時代はほぼ同時期であると考えられる。未だ、鑑定を行っていないため、人間を焼いたとゆう科学的証拠はないが、覆土中から長さ12㎝ほどの骨が出土しており、またSD022から出土した板材が棺桶の部材とも考られることから、人間である可能性が高いと思われる。覆土はいずれも炭化物層や黄褐色層を含み、よく似ているがそれらの層と礫との上下



第25図　焼土坑実測図(1/30)



SK022
1　暗茶褐色土(炭化物含む)
2　炭化物層(板材が含まれる)
3　明褐色土(黄褐色粘土と焼土が混る)
4　暗青灰色粘土(骨片多く含む)
5　黄褐色土(骨片多く含む)
6　炭化物層(骨・焼土含まない)

SK024
1　黄褐色土(焼土・炭化物わずかに含む)
2　暗青灰色粘質土(骨片含む)
3　暗黄褐色粘質土(骨片含む)
4　暗黄褐色粘質土(焼土片多く含む)
5　暗青灰色粘質土
6　炭化物層

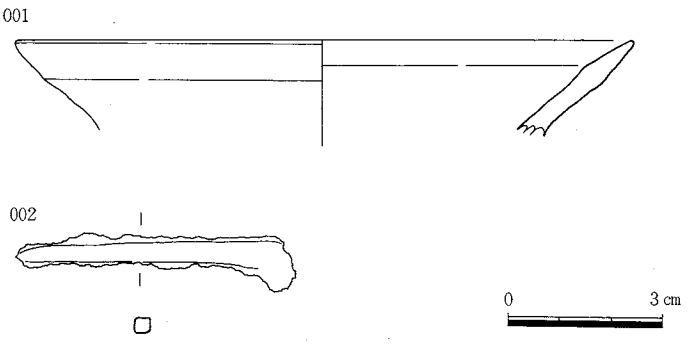
SK026
1　炭化物層
2　褐色土(炭化物・焼土含む)
3　褐色土(炭化物・焼土含む)
4　炭化物層(骨片含む)

第26図　火葬関連施設(1/20)

関係はそれぞれ異なっており、礫の役割については断定できない。SD024は石の下もかなり焼けていたが石は焼土面に密着しており、石を置く前に空だきした可能性も考えられる。また、頭蓋骨など特徴的な骨がみあたらないことなどから墓ではなく、火葬場である可能性も考えられる。

Ⅳ まとめ

本報告書は都市公園整備に伴う発掘調査報告書である。２回にわたる調査の結果、土器包含層、古墳１基、ピット群、火葬関連施設、焼土坑、土坑、溝を確認した。縄文時代の明確な遺構は確認できなかったが、包含層から後期の粗製深鉢が出土している。包含層は土師器や白磁片など各時代の遺物を含んでいる。古墳は１次調査区で検出したが、石室奥の敷石直上から鉄製鋤先が出土した。早良平野周辺の古墳出土例から６世紀後半から７世紀後半であると考えられる。第４図の001・002は採集品であるが、古墳に伴う可能性がある。ピット群は１次・２次ともに多数検出したが、建物としてまとまるものは少ない。そのうち、建物が建ったピットからは少量であるが鉄滓、土師椀が出土しており、中世を中心とするが、その他のピットでは須恵器大甕片や坏蓋の完形品やなど古墳時代から古代の遺物も出土している。焼土坑は１次調査で須恵器大甕片や土師器が出土しているほか、２次調査で火葬関連施設に切られており、時期は古代～中世であろう。土坑からは縄文土器や刻目突帯文土器、須恵器坏蓋、中世の土師質土器など各時代の遺物が出土している。平面形は方形を呈するものと不整形のものがある。火葬関連施設は調査区の中央を走る谷に沿うように位置しており、谷に沿って道があった可能性も考えられる。火葬関連施設の年代であるが、第27図の001と002は２次調査のSK026の出土遺物である。001は土師坏である。遺構の北西隅で上層の炭化物層から伏せた状態で出土した。底部は削平されている。成形は全体に粗く、平面形は楕円形を呈す。復元口径は、長径12.3cm、短径10.3cmを測り、口縁は波状である。橙色を呈し、外面は被熱の為か風化が激しい。内外面に明確な稜がみられる。外面は底部に向けて、屈曲するものと思われる。002は鉄釘である。長さは5.4cmを測り、断面は方形を呈する。土師坏は完形ではないが、15世紀後半から16世紀前後である。１次調査のSK026から出土した炭化物の放射性炭素による年代測定の結果は15世紀前半を示しており、弱干ずれるもののほぼこの年代を裏付けるものである。放射性炭素の年代測定結果は本文最後に記載するとおりである。また002は棺桶に使用された釘と思われるが、土坑の規模から座棺であったと思われる。床面に敷かれた礫は棺を安定させたり、床と棺の間に隙間をあけて通気性を良くすることにより、燃えやすくするなどといった機能をもつものであろうか。火葬関連施設と焼土坑の違いについては、床面に礫を敷いていないことや、壁・床の焼け方が弱いなどがある。しかし、火葬関連施設の中にも壁があまり焼けていないものも多い。覆土については小原池遺跡群（小竹町教育委員会）の調査担当者は火葬施設は骨出土レベルから上層は一気に埋没しているのに対し、焼土坑は炭化物出土レベルから上は自然堆積層であると指摘しており、当てはまる部分が多い。しかし、１次調査のSK028などはレンズ状の堆積を呈するなど、例外もみられる。火葬墓と火葬場の違いであろうか。現状では明確な違いは人骨を含んでいるかどうかとしか言えそうにない。最後に火葬に際し何らかの祭祀が行われたものと思われるが、遺構の周囲がかなり削平されており、痕跡をとどめない。ただ２次調査のSK026から出土した土師坏は祭祀で使用されたか、集骨時に使用されたものと考えられる。火葬関連施設で火葬にされた



第27図　SK026出土遺物（2/3）

人間については中世後半とゆう時期的なものから武士や僧侶、庶民に至る階層が考えられる。遺構の前を走る道は降ると妙福寺の裏に出る細い階段に続いている。妙福寺は織田信長が本願寺を攻めたとき、本願寺に僧兵を送ったと記録があるため、中世末には存在したことが判明しており、火葬関連施設との関わりが考えられる。また、筑前続風土記の早良郡重留村には昌法山正覚寺について「小田部氏の寺でその墓があり」とかかれており、興味深い。余談になるが、67歳になる地元出身者の話では小さい頃は周辺の集落は土葬であったが、重留の集落だけは火葬だったとゆう話をしてくれたが、このことから近年においては、火葬の風習が早良平野南部では一般的ではなかったことが判る。

参考文献

『小原池遺跡群』　（小竹町教育委員会　1993）

『早良群史』

『筑前続風土記』　貝原益軒

放射性炭素年代測定結果

福岡市内遺跡出土の試料について年代測定を行った。その結果を次表に示す。なお、年代値は1950年よりの年数（B．P．）である。

年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとづいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代である。また、試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のとき、3σに相当する年代を下限の年代値（B．P．）として表示してある。また、試料のβ線計数率と現在の標準炭素（MODERN STANDARD CARBON）についての計数率との差が2σ以下のときは、Modernと表示し、δ^{14}C‰を付記してある。

放射性炭素年代測定結果

試料	採取地点・層準	種類	年代値	コードNo
No15	古田０２６	炭化材	530 ± 70（1420A．D）	GaK－18632

（学習院大学理学部年代測定室）

図　　版

図版1　　1次調査

1）1次調査区全景（北から）

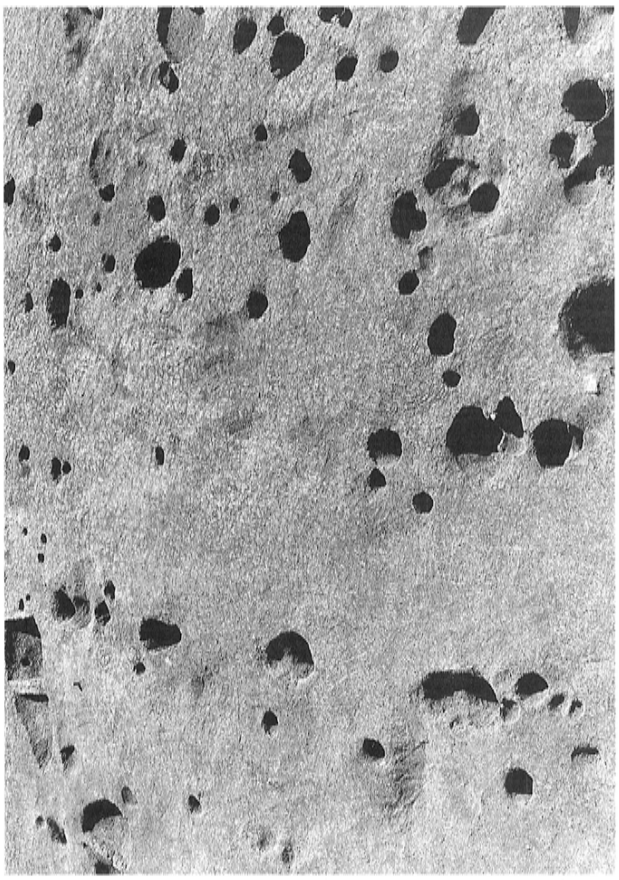
2）調査区南半（北から）

図版２　　１次調査

1）調査区全景（北西から）

2）１号墳（北から）

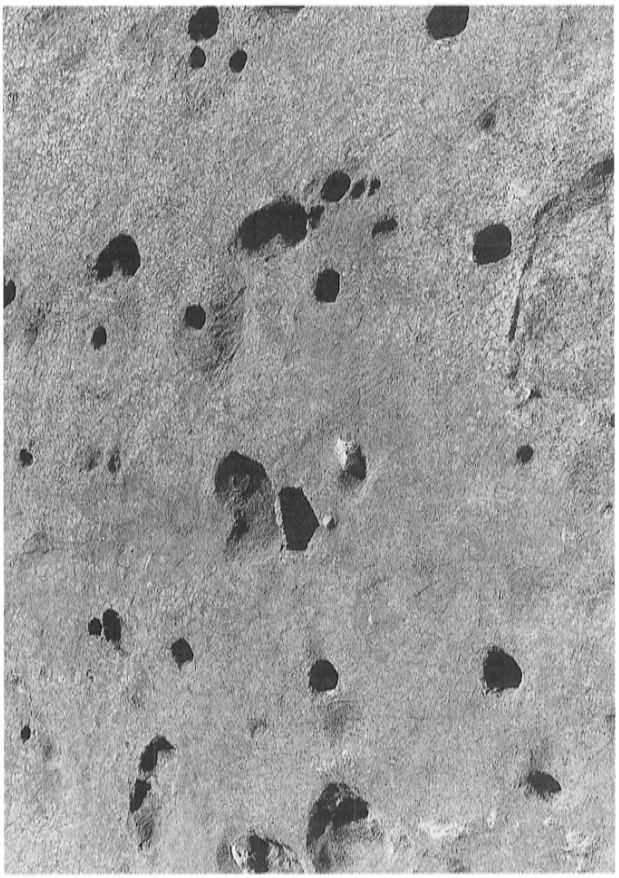
図版3　　1次調査



3）SB016（北から）

4）SB059（西から）

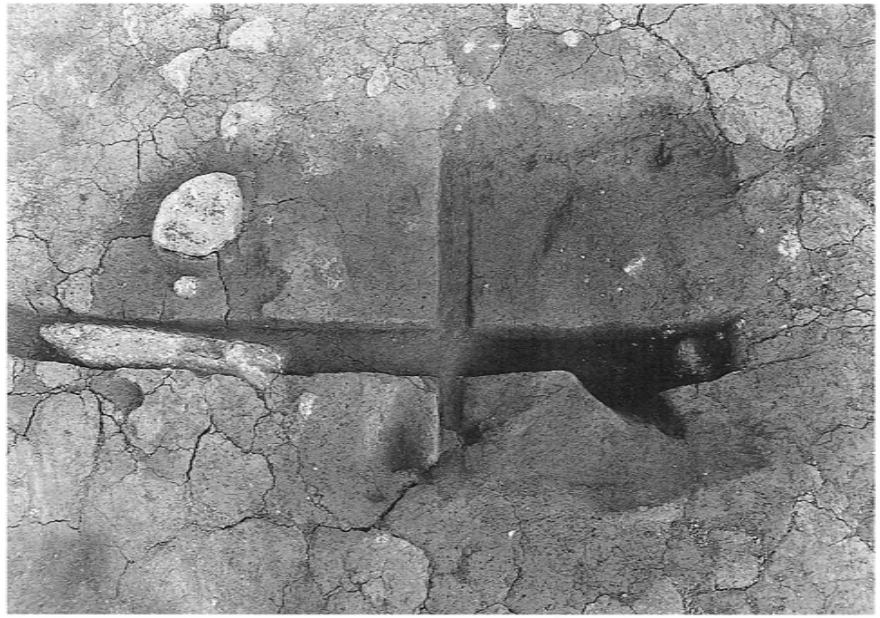
1）2区（南から）



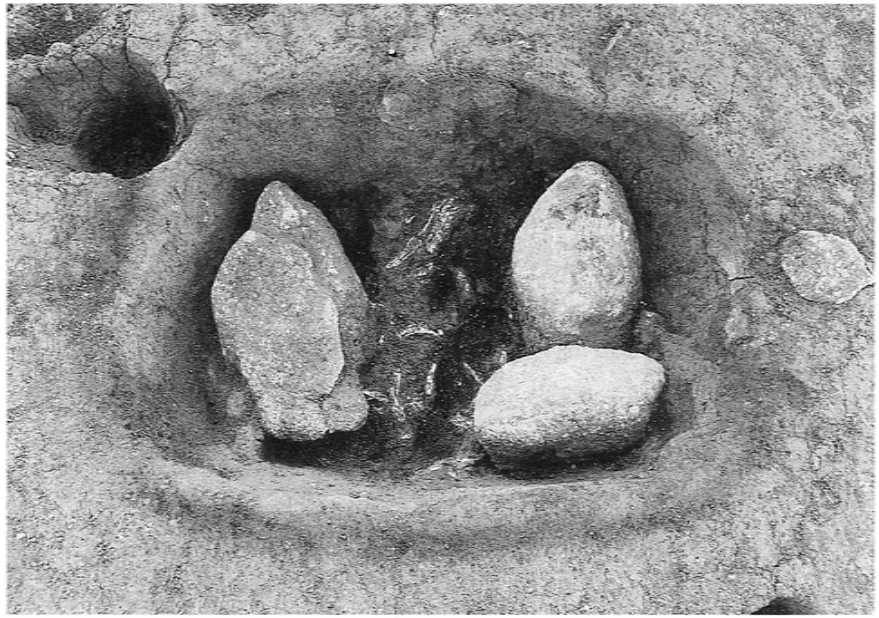
2）SB017（北から）

1）1区（北から）

2）ピット集中部（第17図・北から）



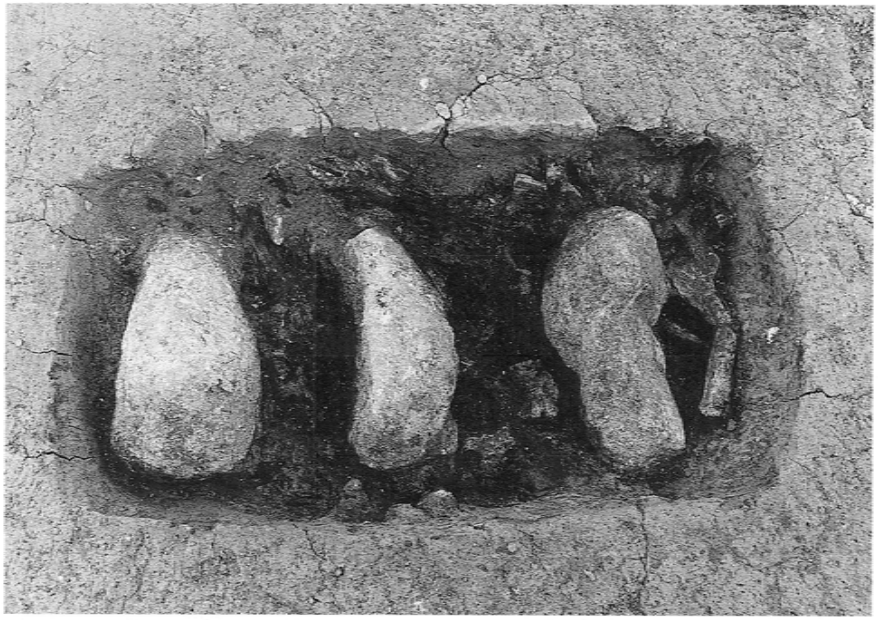
3）SK026（西から）



4）SK028（東から）

1）SK044（東から）

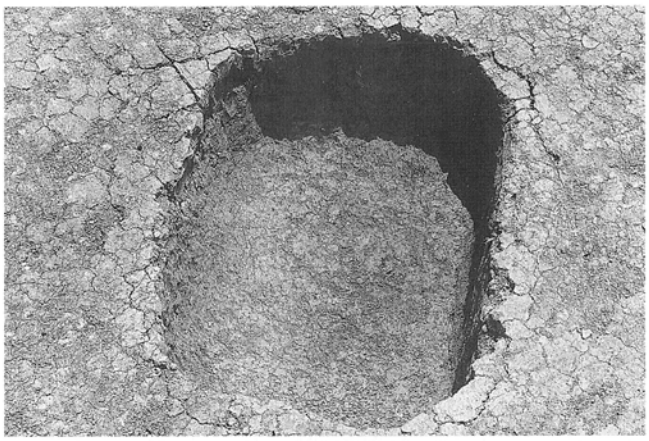
3）SK047（西から）



2）SK045（西から）

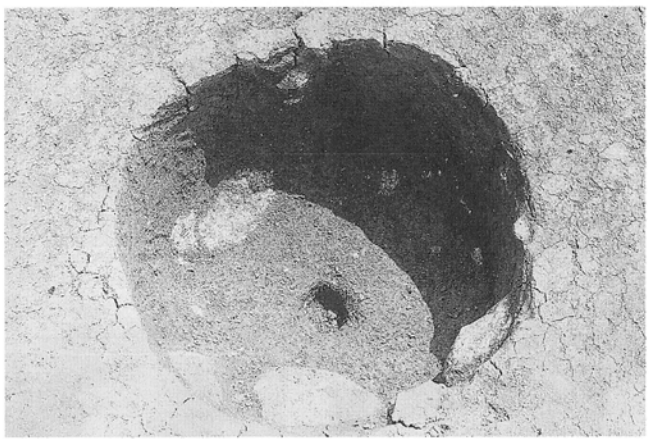
4）SK047（西から）

図版6　　1次調査

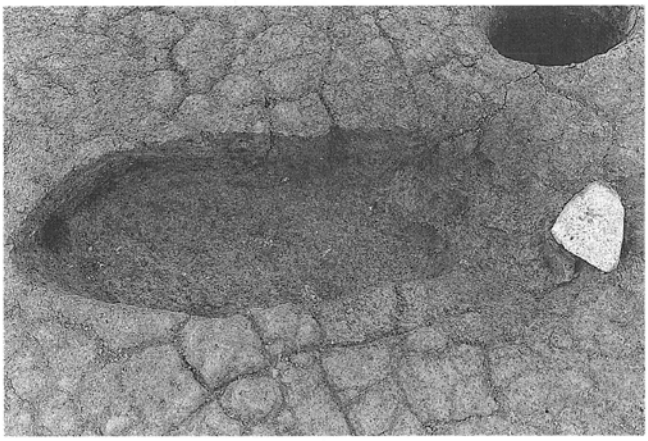


1）SK001（北から）

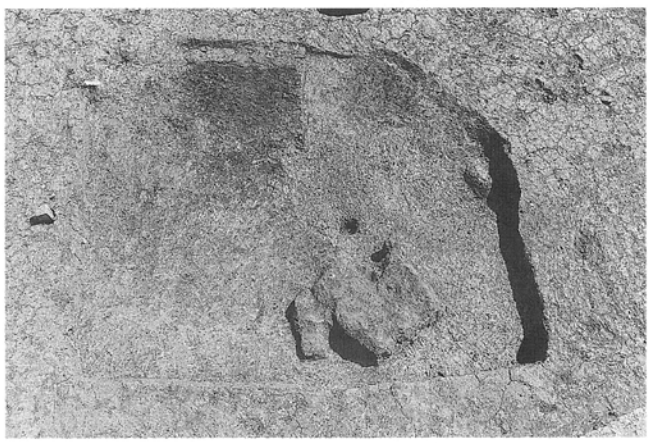
5）SK015（西から）



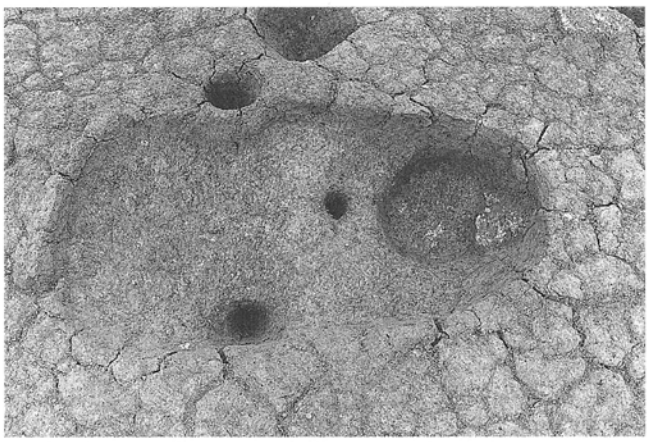
2）SK002（東から）



6）SK029（西から）



3）SK010（南から）

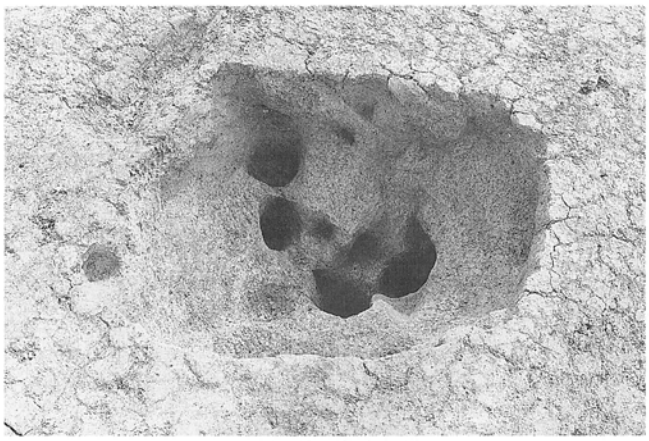


7）SK032（南から）

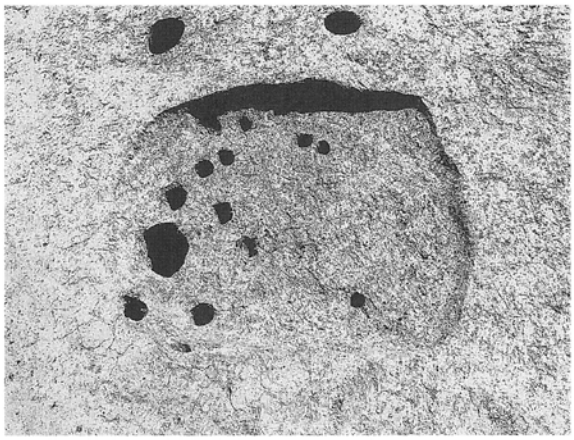
4）SK011（東から）

8）SK035（北西から）

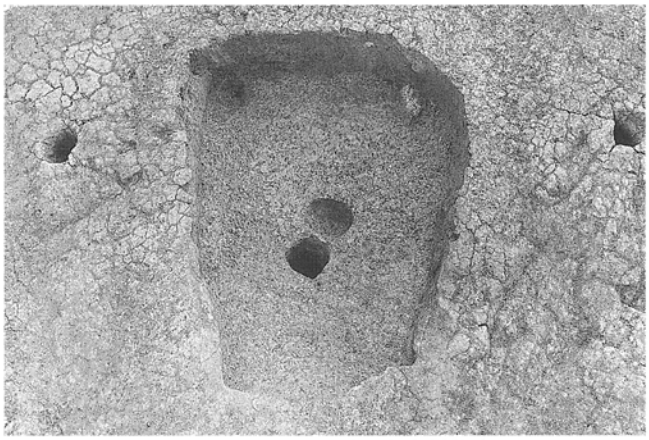
図版7　　1次調査



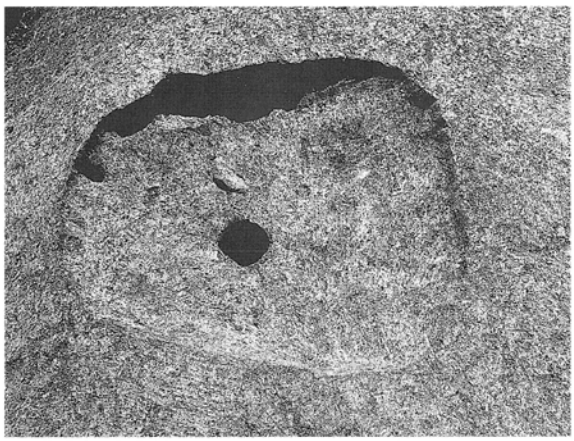
1）SK014（東から）



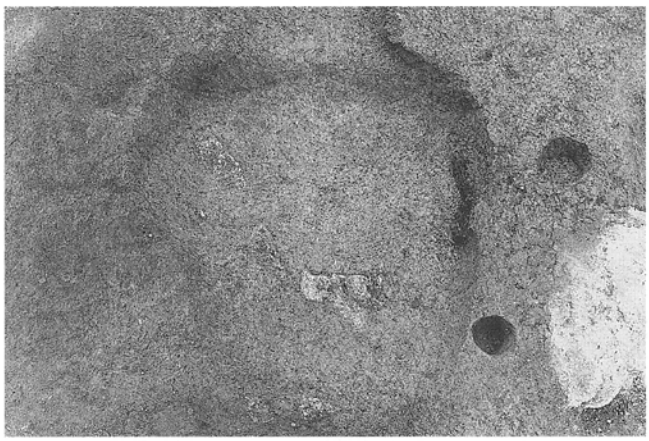
5）SK041（西から）



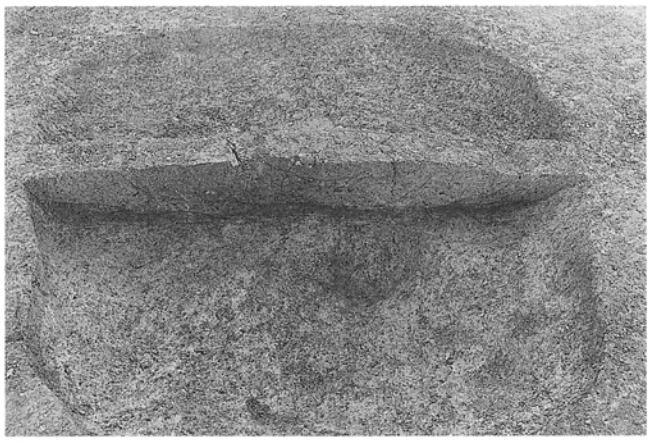
2）SK023（西から）



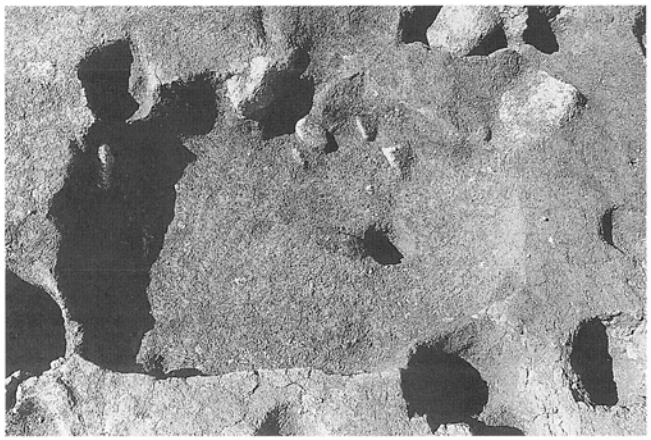
6）SK042（北から）



3）SK024（西から）



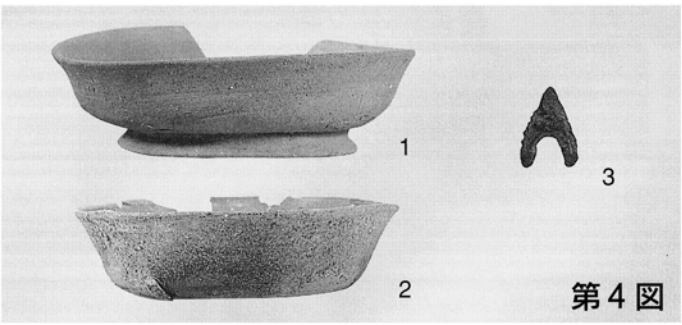
7）SK042（東から）



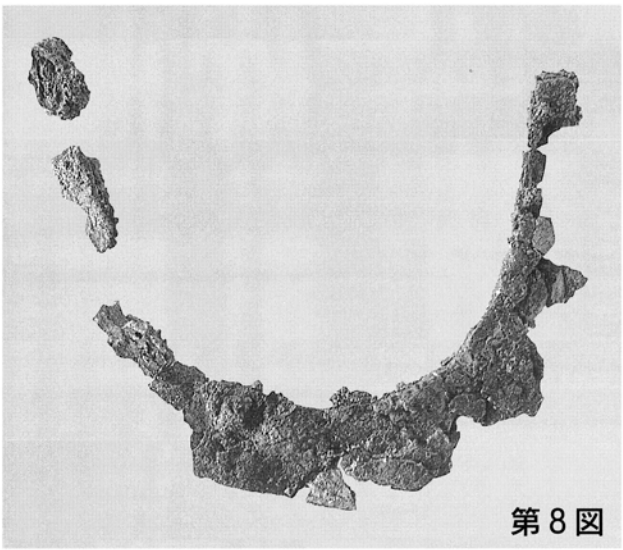
4）SK025（東から）

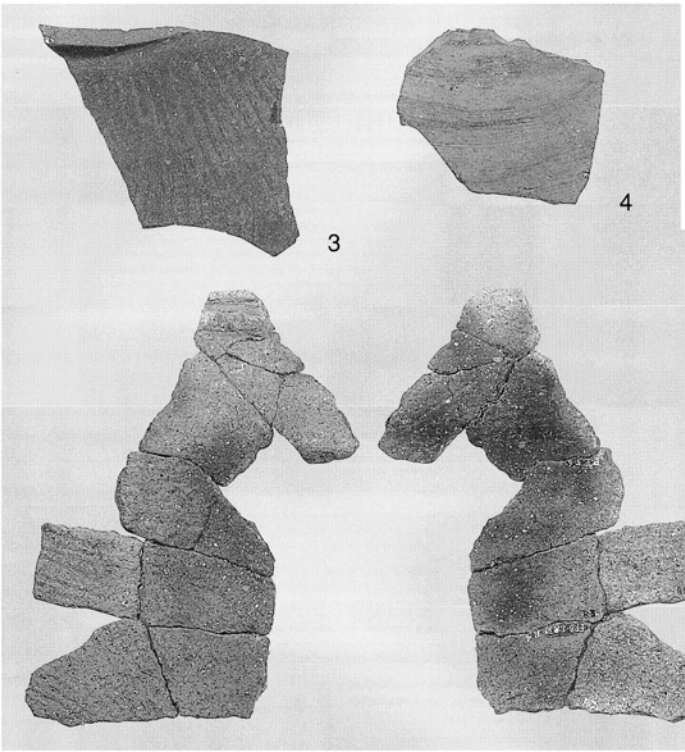
8）SK051（東から）

図版8　　1次調査

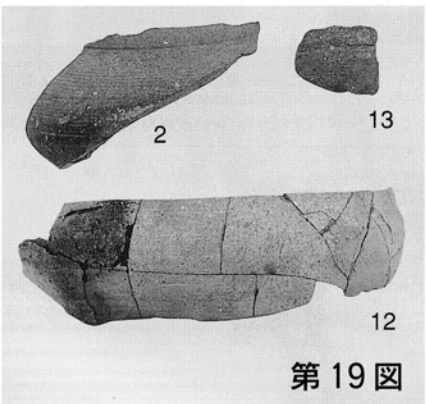


第4図

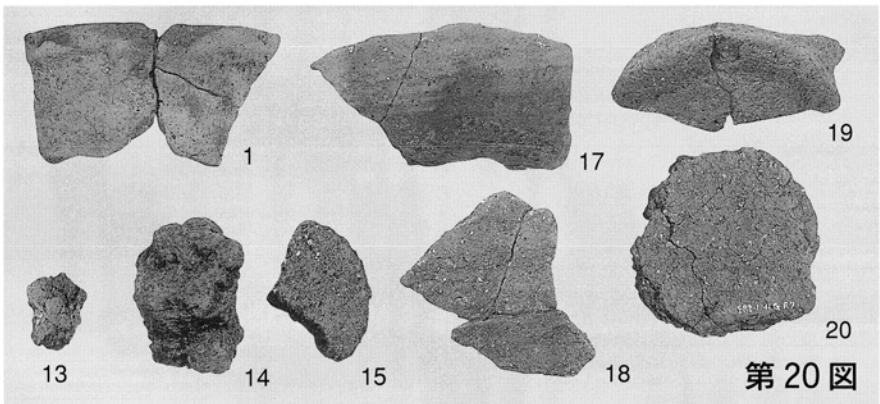

第8図



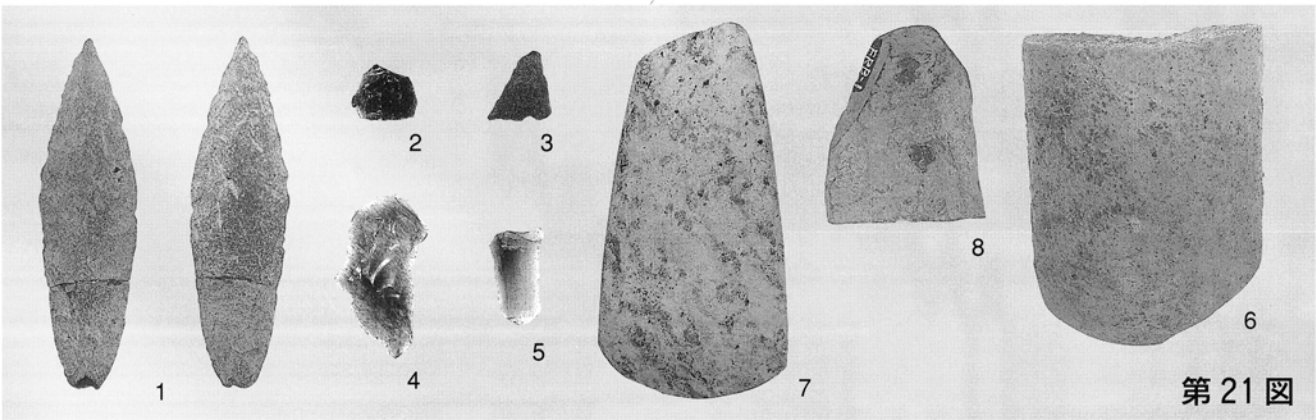
第14図



第19図



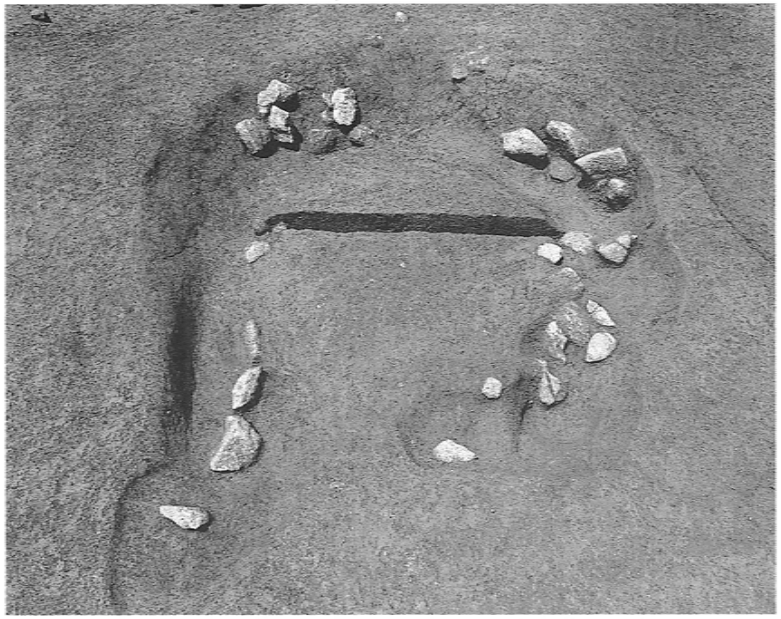
第20図



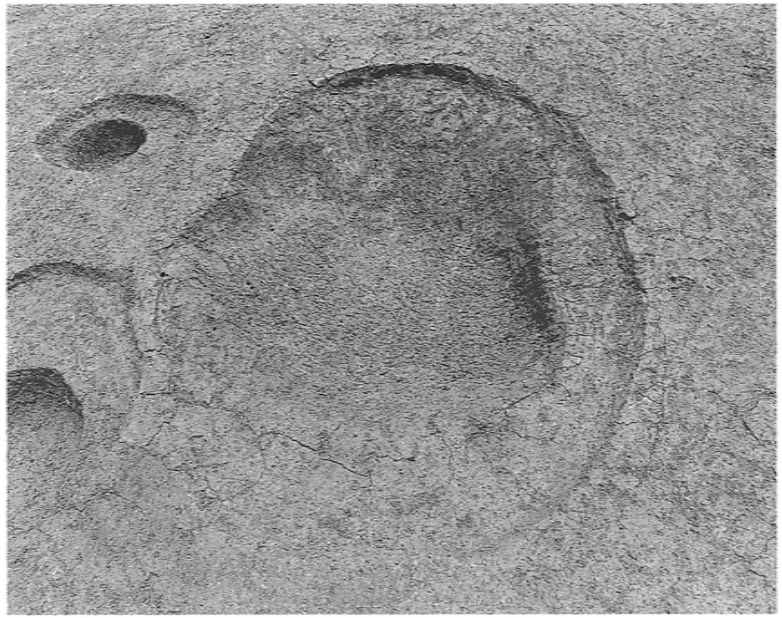
第21図

1）２次調査区全景（西から）

2）SK005（西から）



3）SK007（東から）



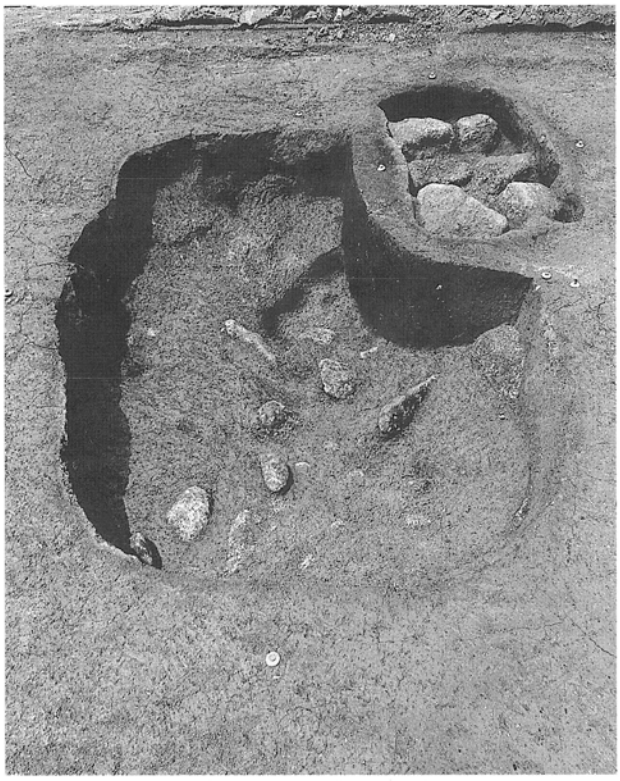
4）SK010（北西から）

図版 10　　2 次調査

1）SK012（南から）

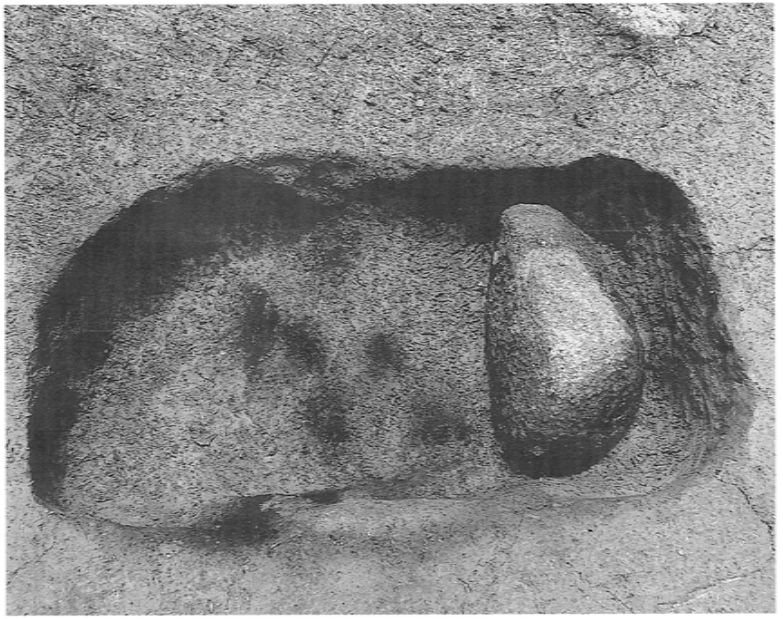
2）SK019（西から）

3）SK018（東から）

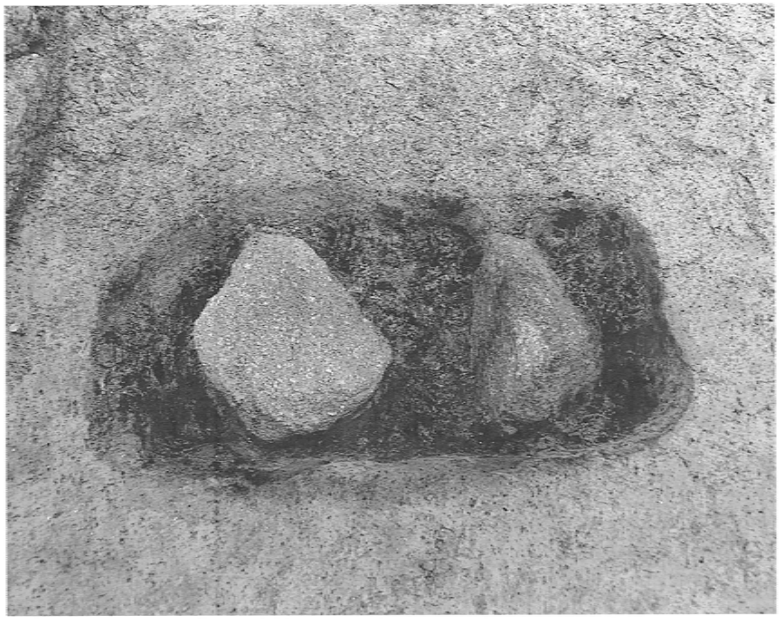


4）SK025（南から）

1）SK022（東から）



2）SK022（西から）



3）SK022（西から）

4）SK024土層（南から）

図版 12　　2 次調査

2）SK024（南から）

1）SK024（南から）

3）SK026（東から）

古田遺跡

—古田遺跡第1次・第2次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第509集

1997年（平成9年）3月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8－1

印　刷　株式会社ドミックスコーポレーション
福岡市博多区博多駅南六丁目6－1